

論文

NHK 録音による沖縄音楽レコード:1950-1951 年
— 湛水流・山内盛彬と「沖縄諸島の古謡と踊の会」 —

Okinawan Music Records Produced by NHK in 1950 and 1951:
Tansui-ryu, Seihin Yamauchi, and an April 1951 Okinawan Archipelago Old Song and Dance Event

高橋美樹 (高知大学教育学部・音楽学研究室)

Miki TAKAHASHI

Laboratory of Musicology, Faculty of Education, Kochi University, Kochi, Japan

ABSTRACT

The aim of this document is to clarify the situation regarding 22 recordings produced in 1950 and 1951 by NHK(Japan Broadcasting Corporation) of Okinawan music. The recordings were performed by Okinawan musicians living in the Kanto area. Nippon Columbia Co., Ltd. physically recorded and manufactured these records. The records were recorded and preserved as material for broadcast and were not released commercially. The following two conclusions were reached. First, on 18th and 19th January 1950, NHK engaged Seihin Yamauchi, a performer of Okinawan classical music, and recorded seven Tansui-ryu songs and a commentary on Tansui-ryu. These eight records represent valuable voice recordings related to the Tansui-ryu school that Yamauchi sought to preserve and pass on throughout his whole life. These performances were recorded just before Yamauchi became very active in Japan and overseas in publishing research related to Okinawan music and in carrying out surveys of ethnic music. Second, in May and June 1951, NHK recorded folksongs from Okinawa main island, the Yaeyama islands, and Iejima. Okinawans living in the Kanto area performed the folksongs. The Okinawans had appeared at the “Okinawa-shotou no Ko-utai to Odori no Kai” (Okinawan archipelago old song and dance event; venue: Waseda University Okuma Auditorium) held on 29 April 1951. NHK chose 22 of the songs performed at the event, producing 14 records. The success of this event was also a direct stimulus for the 1952 designation of Okinawan folk performing arts as a Kawasaki City intangible cultural asset, as a special case. In addition, in 1954, Okinawan folk performing arts were designated as a Kanagawa Prefecture intangible cultural asset. Kokichi Nagata and Yasuji Honda, experts on Okinawan music and dance, supported this move.

はじめに

本稿の目的は1950年～1951年NHK日本放送協会が関東在住の沖縄出身者を対象に、沖縄音楽を録音したSPレコード22枚の実態を明らかにすることである。NHKが制作し、日本コロムビア・レコードが録音・製造したレコードは商業出版されておらず、放送素材として記録・保存した。

これまで筆者は沖縄、日本本土、北米、南米、ハワイで発売された沖縄音楽のレコードについて研究を進めてきた。特に、関西に出稼ぎに来た沖縄出身者や海外に渡航した沖縄系移民が望郷の想いを募らせ聴いたSPレコードについて、演奏者・制作者らの言説や新聞記事を基にその実態を明らかにした。

また、1953年沖縄芸能文化使節団による「琉球国劇公演」(於：東京・大阪)では沖縄→東京→大阪→神戸→沖縄と移動する中、東京ではコロムビア・レコード、大阪ではマルフク・レコードにて琉球古典音楽や沖縄民謡を録音した(高橋2019参照)。高橋2019を執筆していた折、国立国会図書館に1950年～1951年NHK制作の沖縄音楽SPレコードの所蔵が判明した。このレコードは沖縄県や日本本土の研究機関、図書館には所蔵されておらず、極めて貴重なものである。筆者は2018年8月に現物を閲覧し、レーベルのデジタル撮影を実施した。レコード音源は国会図書館の歴史的音源(れきおん)で聴くことができる。しかし、筆者が勤務する高知大学は東京から遠方にあるため、2018年9月高知大学学術情報基盤図書館に歴史的音源の配信参加館申請を依頼し、必要な時にいつでも音源を聴取できる環境を整えた。22枚のSPレコードは下記の2種類に分けることができる。

(1)NHKは1950年1月18日～19日琉球古典音楽の演奏家・研究者の山内盛彬(1890-1986)を招聘し、湛水流7曲を録音した。そして、レコード8枚を制作した。

(2)1951年4月29日「沖縄諸島の古謡と踊の会」(主催:民俗芸能の会)が早稲田大学大隈講堂で開催された。NHKは演奏された演目の中から22曲を選曲し、同年5月18日、6月5日、6日、12日に関東在住の沖縄出身者らによって録音した。そして、レコード14枚を制作した。

本稿では(1)(2)のレコード曲目、歌手・演奏者を整理するとともに、山内盛彬の研究・演奏活動における1950年NHK録音の位置付けを試みる。さらに、「沖縄諸島の古謡と踊の会」が高く評価されことを契機に、沖縄民俗芸能が1952年川崎市の無形文化財に、1954年神奈川県無形文化財に指定された経緯を辿る。また、1948年に東京・沖縄芸能保存会、1950年に川崎沖縄芸能研究会が結成された要因を探り、関東における沖縄音楽・舞踊団体の活動について言及する。

なお、曲目を分類する際、本研究の分析概念として、下記のジャンル定義を設定した。

「琉球古典音楽」とは琉球王国時代に首里の士族層によって育まれた歌を指す。山内1967『民俗芸能全集 第10(欽定楽譜湛水流工四(復刻))』に掲載された湛水流の曲目及び野村流『声楽譜工四』上巻、中巻、下巻、続巻掲載の曲目を「琉球古典音楽」に分類した。

「沖縄古謡」とはクエーナ、オモロなど沖縄で古代から伝わる歌謡を指す。「伊江島古謡」とは伊江島に伝わる古い歌謡を指す。

「沖縄民謡」とは沖縄本島及び周辺諸島で伝承された作者不詳の歌謡を指す。「伊江島民謡」とは伊江島で伝承された作者不詳の歌謡を指す。「宮古民謡」とは宮古島及び周辺諸島で伝承された作者不詳の歌謡を指す。「八重山民謡」とは八重山諸島で伝承された作者不詳の歌謡を指す。「沖縄箏曲」とは沖縄で伝承された箏の楽曲を指す。「宮古の芸能」は宮古諸島で伝承され、村落共同体の年中行事や祭りの場で演じられる民俗芸能を指す。「八重山の芸能」とは八重山諸島で伝承され、村落共同体の年中行事や祭りの場で演じられる民俗芸能を指す。「琉球舞踊」とは沖縄諸島に伝わる舞踊曲を指す。「八重山舞踊」とは八重山諸島に伝わる舞踊曲を指す。「組踊」とは18世紀以来、琉球(沖縄)で伝承されてきた沖縄独特の伝統楽劇(音楽、舞踊、台詞で構成)を指す。

引用文の旧字体・旧仮名遣いは新字体・新仮名遣いに改めた。また、□は判読不明文字を示す。なお、掲載するレコード写真は全て筆者が撮影し、国立国会図書館から資料提供されたものである。

1. 1950年1月18日～19日山内盛彬による湛水流の録音

『NHK民謡調査の記録:1939-1994』8によると、1925年に開局したJOAK東京放送局(現在のNHK)は1937年ラジオ番組の放送素材として民謡資料を集大成するため「全国俚謡調査」を実施した。1938年には実地の調査が計画され、委嘱を受けた民謡研究家の町田嘉章が1939年長野・新潟県の民謡調査収録を実施した。そして、1940年以降、組織的な継続事業として全国的な民謡調査(録音・採譜)が開始されることになる。調査の成果は1944年～1993年に地方別の『日本民謡大観』を刊行することで次々に発表された。

同著「第1部NHK民謡調査業務編年史」には1950年の調査が次のように記された。

◆昭和25年(1950) 定例の現地調査は西日本におよび、7、8月の20日間、中国・四国地方のほぼ全放送局のスタジオを使って収録を行った。これより早く1月には、愛知県奥三河の「振草花祭」を祭の時期に合わせて現地収録し、東京では「湛水流」琉球音楽の山内盛彬(東京在住)をスタジオに招いて、その演目を録音した(下線部筆者)(NHK「日本民謡大観」制作スタッフ編1995:22)。

同著「第2部民謡調査実施記録」には山内盛彬による録音が次のように記載された。

◆昭和25年(1950)

◇1月18日～19日 琉球音楽「湛水流」

NHK 小川昂(筆者注:正しくは昂)、塚田博(東京)

日本コロムビア 松岡醇三

(日本コロムビア) 演唱・演奏 山内盛彬 収録曲数7曲

(NHK「日本民謡大観」制作スタッフ編1995:76)

東京在住の山内盛彬による湛水流の録音が1950年1月18日～19日に実施された。これはNHKによる初の沖縄音楽の録音であろう。レコードの制作側からNHKの小川昂と塚田博が、レコードの製造側から日本コロムビアの松岡醇三がスタジオ録音に立ち会った。山内盛彬は「明治後半から昭和にかけて活躍した沖縄の音楽研究者、及び王府オモロ、琉球古典音楽湛水流の伝承者でもある。祖父の山内盛熹は古典音楽を野村安趙に師事し、『欽定工四』編纂に携わったことで知られている」(海野・金城2008:131)。

なお、東洋音楽学会編1951:181に「日本放送協会は両3年来、貴重な民謡採集レコードの仕事を続けているが、今迄に完了したのは、アイヌ歌謡(第1輯26枚、第2輯19枚)、中部地方民謡(金沢、名古屋両局管内)7枚、近畿地方民謡(19枚)、愛知県(花祭)5枚、琉球音楽8枚(山内盛彬氏他吹込)」と記載がある。1951年時点で山内の録音は完了していた。

1.1 1950年琉球音楽「湛水流」レコード8枚

表1は国会図書館所蔵の琉球音楽「湛水流」レコード8枚(全16トラック)をレーベル情報に基づき、整理したものである。レコード番号はPR-512～PR-519、全て両面盤である。録音曲目は7曲(15トラック)で、湛水流に関する解説が1トラック収録された。曲名は《作田節》《早作田節(下げ出し・揚げ出し)》《首里節》《チャナ節》《諸屯節》《揚作田節(下げ出し・揚げ出し)》《暁節》である。収録曲を分析概念に基づきジャンル分類した結果、琉球古典音楽7曲となった。

演奏者は山内盛彬のみである。実際のSPは写真1～写真8を参照されたい。

1.2 1950年琉球音楽「湛水流」レコードに関する新聞記事・広告

調査した結果、本レコードに関する新聞記事1件、広告2件が見つかった。唯一の記事1950年1月25日「湛水流 山内氏の吹込で音版に蘇る」『沖縄新民報』Bには次のように紹介された。

琉球音楽中の遺産湛水流の正しい流れをくむ第一人者山内盛熹氏の孫にあたる山内盛彬氏は、当流の保存に懸命なる努力を払い、祖父直き伝の湛水流を今日に伝え、将来これを如何に保存するかに腐心していたが、氏の熱意と香り高い芸風に動かされた東京放送局では山内氏とコロムビア会社と架け橋の役をつとめ、ここに目出度く話がまとまり1月18日から19日にかけて山内氏はコロムビア会社で吹込演奏を行った、会社が山内氏の壮舉に応じたレコード版数は全部で8枚の大集成であり、1流1演奏者のために、かくも大たんな企画をたてた会社側の英断は専ら古代沖縄文化史上に、さんらんたる足跡を残した当流を現世に、復活させるという文化的意欲から出発したものとして早くも賞讃を勝ち得ているが、まさに亡び去らんとする湛水流としては当代の第一人者山内氏に音楽的生命を蔵していた事は何より幸なことであった、今回の吹込みは壮重な昔節を初めとして軽快、典雅、憧憬に満ちあふれる珠玉的歌曲数十曲に及び音楽ファンの琴線をゆすぶるものばかりであり曲目は次のとおりである(筆者注:曲名は略)(下線部筆者)(1950年1月25日『沖縄新民報』B)。

本レコードに関する広告2件は1950年9月25日「広告 山内盛彬著“琉球の音楽”」『沖縄新民報』B、1950a年10月15日「広告 山内盛彬著“琉球の音楽”/琉球音楽発表会」『沖縄新民報』Bである。新聞広告の主な目的は山内初の著書『琉球の音楽 楽譜 第1集』の宣伝であり、レコード情報も盛り込まれた。広告には「山内盛彬吹込/レコード取次/湛水流8枚 鳩間節1枚/希望者は御申込迄」の後、著書の発売元・レコード取次先として「東京都大田区雪谷町546 沖縄舞踊音楽研究会 責任者 山内鶴子」と記された。住所は山内の自宅であり、山内鶴子とは山内の妻の名である。「湛水流8枚」は1950年録音のSPを指すが、「鳩間節1枚」とは国際文化振興会制作SP『日本音楽集48 民謡/琉球大島民謡 鳩間節・豆が花/鶯の鳥節・安里屋節』山内伶晃(KBS-48)(1943-1944年頒布)¹⁾を指すと思われる。

また、山内は1950年NHK録音について次のように振り返っている。

昭和26年(筆者注:正しくは昭和25年)に最古の古典とされている湛水流の全曲を、レコーディングするチャンスを得た。日本放送協会とコロムビアレコード社の好意のお陰だった。湛水流は弾きなれてはいるものの、レコード吹き込みとなるといつもと違って緊張した。そしてその年に、沖縄文化協会で披露した。だが残念なことに、そのレコードは私の手元にない。ぜひ捜さなければならぬのだが…(下線部筆者)(山内1980年10月21日:1)。

湛水流の録音にNHKと日本コロムビアが関わっていたことは山内の言説でも確認できる。著書『琉球の音楽 楽譜 第1集』の

表 1 1950年NHK録音・琉球音楽「湛水流」レコード

(作成：高橋美樹)

録音年月日	分析ジャンル	曲名	歌手・演奏者	レコード番号	制作	製造元
1950年1月18日	琉球古典音楽	琉球音楽 湛水流 作田節(一)	山内盛彬	PR-512 (P3201)	NHK	コロムビア
1950年1月18日	琉球古典音楽	琉球音楽 湛水流 作田節(二)	山内盛彬	PR-512 (P3202)	NHK	コロムビア
1950年1月18日	琉球古典音楽	琉球音楽 湛水流 作田節(三)	山内盛彬	PR-513 (P3203)	NHK	コロムビア
1950年1月18日	琉球古典音楽	琉球音楽 湛水流 早作田節(下げ出し・揚げ出し)	山内盛彬	PR-513 (P3204)	NHK	コロムビア
1950年1月18日	琉球古典音楽	琉球音楽 湛水流 首里節(一)	山内盛彬	PR-514 (P3205)	NHK	コロムビア
1950年1月18日	琉球古典音楽	琉球音楽 湛水流 首里節(二)	山内盛彬	PR-514 (P3206)	NHK	コロムビア
1950年1月18日	琉球古典音楽	琉球音楽 湛水流 チャンナ節(一)	山内盛彬	PR-515 (P3207)	NHK	コロムビア
1950年1月18日	琉球古典音楽	琉球音楽 湛水流 チャンナ節(二)	山内盛彬	PR-515 (P3208)	NHK	コロムビア
1950年1月18日	琉球古典音楽	琉球音楽 湛水流 チャンナ節(三)	山内盛彬	PR-516 (P3209)	NHK	コロムビア
1950年1月19日	琉球古典音楽	琉球音楽 湛水流の特色について	解説:山内盛彬	PR-516 (P3210)	NHK	コロムビア
1950年1月19日	琉球古典音楽	琉球音楽 湛水流 諸屯節(一)	山内盛彬	PR-517 (P3211)	NHK	コロムビア
1950年1月19日	琉球古典音楽	琉球音楽 湛水流 諸屯節(二)	山内盛彬	PR-517 (P3212)	NHK	コロムビア
1950年1月19日	琉球古典音楽	琉球音楽 湛水流 揚作田節(下げ出し)	山内盛彬	PR-518 (P3213)	NHK	コロムビア
1950年1月19日	琉球古典音楽	琉球音楽 湛水流 揚作田節(揚げ出し)	山内盛彬	PR-518 (P3214)	NHK	コロムビア
1950年1月19日	琉球古典音楽	琉球音楽 湛水流 暁節(一)	山内盛彬	PR-519 (P3215)	NHK	コロムビア
1950年1月19日	琉球古典音楽	琉球音楽 湛水流 暁節(二)	山内盛彬	PR-519 (P3216)	NHK	コロムビア



写真1 山内盛彬 SP『琉球音楽湛水流 作田節(一)』
コロムビア:PR-512:1950年



写真3 山内盛彬 SP『琉球音楽湛水流 首里節(一)』
コロムビア:PR-514:1950年



写真2 山内盛彬 SP『琉球音楽湛水流 早作田節』
コロムビア:PR-513:1950年



写真4 山内盛彬 SP『琉球音楽湛水流 チャンナ節(一)』
コロムビア:PR-515:1950年



写真5 山内盛彬 SP『琉球音楽湛水流の特色について』
コロムビア:PR-516:1950年



写真8 山内盛彬 SP『琉球音楽湛水流 曉節(一)』
コロムビア:PR-519:1950年



写真6 山内盛彬 SP『琉球音楽湛水流 諸屯節(一)』
コロムビア:PR-517:1950年



写真7 山内盛彬 SP『琉球音楽湛水流 揚作田節
(下げ出し)』コロムビア:PR-518:1950年

出版を記念して、1950年10月28日山内らによる「琉球音楽研究発表会」(於:東京基督教女子青年会館YWCA)(主催:沖縄音楽舞踊研究会)が開催された。東洋音楽学会編1952:96-97に会のプログラムが記録されており、「3、湛水流『早作田節』」の演目がある。会の予告記事1950b年10月15日『沖縄新民報』Bに「湛水流の吹込披露」と記載があることから、NHK制作『早作田節』のレコードを蓄音器で再生した可能性が高い。

なお、山内1950の口絵にはNHKで録音後、撮影した山内の写真が掲載されている。写真には「東京雪ヶ谷の書齋で往時の琉装をした著者/1950年1月18日19日/日本放送局協会コロムビヤ(まま)・スタジオで湛水流全曲(8枚)のレコード吹込を終えた記念撮影」と解説がある。

1.3 山内盛彬の演奏・研究活動における1950年NHK録音

山内の活動は琉球古典音楽の伝承者としての演奏と、古謡、民謡、古典など多岐に亘る沖縄音楽の研究を主軸に展開された。演奏活動は演奏会や舞踊公演における実演の他に、三越や松坂屋など百貨店で開催される沖縄展覧会の関連イベントで実演した記録がある。また、ラジオ放送における演奏も積極的に行っていた。

研究活動は研究成果を発表する場として、学会における研究発表、演奏会における楽曲解説を行い、戦後は東洋音楽学会(1936年設立)において口頭発表する機会が増えた。並行して『東洋音楽研究』など学会誌に論文を投稿するとともに、著書や楽譜集を自費出版した。また、1951年以降はアメリカ、ブラジルなどの研究機関から招聘され、長期間に亘る研究調査と講演・演奏会を開催した。

本項では山内の演奏・研究活動を整理した上で、1950年NHK録音の位置付けを試みる。

なお、表2「山内盛彬の年譜」は山内・比嘉編 1993:493-501の記録を元に、研究発表・論文などの研究活動は該当の新聞記事や文献を照合した上で作成したものである。

1.3.1 山内盛彬の演奏・研究活動

山内は1890年3月9日那覇市首里金城町で山内盛明、徳平ウトの長男として誕生した。1904年14歳の頃から祖父・盛熹から湛水流、野村流の手ほどきを受ける。1908年沖繩師範学校に入学後も寄宿舎の外出日や夏休みには自宅に戻り、盛熹から湛水流を教わっていた(山内1980年10月16日:1参照)。一方、沖繩師範学校では東京音楽学校出身の園山民平から西洋音楽の理論・知識を学んだ。1904年には湛水流工四を五線譜化し、古典を西洋音楽の様式で表記する試みを実行した。金城厚は「当時としては珍しくかつ貴重なバイ・ミュージカルの素養の持ち主であった」(金城2004:7)と評している。

1910年「20歳の頃琉球王朝最後のおもろ主取・安仁屋真莉からおもろを採取するとともにその誦法を受け継ぐ」(山川編1983:31)。1912年沖繩師範学校卒業後、1915年には西洋音楽を学ぶために上京し、東洋音楽学校に入学する。田辺尚雄(日本における民族音楽研究のパイオニア)が担当した西洋音楽史の講義では蓄音器でレコードを聴き、授業後は名曲を鑑賞する機会を得た(山内1993:519参照)。1916年祖父・盛熹が逝去した後、沖繩に戻り、1917年沖繩県宮城島の尋常小学校に勤務した。

1922年7月26日～30日恩師の田辺が沖繩本島の音楽調査を実施するため来島し、山内は沖繩県から案内役に任命される(高橋2017:154参照)。調査の際、山内は古典、民謡、舞踊の楽曲解説、歌詞や楽器の説明をするため、周到な準備を進め任務に当たった。そして、1925年田辺が歌舞伎座で歌舞伎舞踊劇『与那国物語』を公演した際、山内は作曲、選曲、舞踊の振付などを任せられ、沖繩音楽全般の知識、演奏技術を伝授した(高橋2019a参照)。1925年当時東京で教職に就きながら演奏・研究活動を行っていた山内は同年9月5日～7日「啓明会第15回講演」(於:東京美術学校)にて「琉球の音楽に就きて」と題して講演する。柳田国男らが結成した民俗芸術の会(1927年7月発足)では1928年1月「琉球音楽の演奏と解説」と題し発表した(1928年8月『民俗芸術』1巻8号:89)。

さらに、1925年以降はラジオ放送で演奏や研究の成果を披露する機会が増える(高橋2019参照)。1925年JOAK「日本音楽史講座」では田辺が担当する「第5回江戸時代の音楽(その1)三味線の渡来と尺八曲の変遷について」で古典を実演し、「第11回箏曲の変遷」で琉球八橋流箏曲を演奏した。1927年8月13日にはJOAK「民謡の夕」で沖繩・八重山民謡《四季口説》《鳩間節》《与那国の猫小節》他全6曲を演奏した。1927年4月19日JOAK他5局では「蛇味線歌謡曲」と称する《奄美節》《四季》《杜の苺》《四季口説》《取ったる金は》《与那国の小猫》6曲を演奏、

放送した。佐藤惣之助が訳詩し、山内が編曲したこれらの作品は後に「訳詩琉球民謡」と呼ばれるようになる。そして1929年には「訳詩琉球民謡」から4曲を録音し、その中の2曲《与那国の小猫》《奄美節》をニッポン・レコードから発売した。このレコードは山内の音源の中でも現存する極めて貴重な記録であり、沖繩県立芸術大学附属図書館で所蔵している(高橋2020近刊参照)。

一方、演奏活動の場は多岐に亘り、百貨店における沖繩展覧会関連イベントとして下記の2件が挙げられる。1件目は1929年10月24日～31日松坂屋「琉球美術工芸品展覧会」にて、27日「講演と舞踊音楽の会」の「琉球民謡と舞踊」に出演した(1929年10月25日『読売新聞』6)。2件目は1930年1月20日～28日三越「琉球展覧会」の演芸会「琉球民謡と舞踊」に出演した(三越編1930参照)(1930年1月20日『読売新聞』夕刊:1)。

また、数々の新作童謡を発表してきた山内は、1934年『山内伶児童謡曲集』をシンフォニー楽譜出版社から出版する。

戦後になると、研究活動がより一層活発に展開される。1946年東京で沖繩古典音楽舞踊保存会を設立し、山内は顧問の1人に名を連ねた(1948年2月20日『自由沖繩』2)。1948年東京音楽学校講堂で「東洋音楽の5度旋法論」と題した研究発表と、琉球古典音楽舞踊の実演をする(東洋音楽学会編1951:180)。1949年沖繩文化協会では「世界文化史に貢献するオモロの謡い方」と題し講演した。

特筆すべき事項として、1949年、1950年の2年連続、文部省から個人研究の補助金として研究費が交付された(1949年10月25日『沖繩新報』B)。特に1950年²⁾は「琉球音楽の研究」に金2万円が交付されたことにより(1950年5月25日『沖繩新報』B)、これまで実施できなかった調査研究が可能となった。

1949年には著書出版に向けて、奥間徳一らの発起で出版後援会が結成され(1949年6月25日『沖繩新報』B)、遂に1950年9月山内初の楽譜集『琉球の音楽 楽譜 第1集』が出版された。出版記念として、1950年10月28日東京基督教女子青年会館YWCAにて沖繩音楽舞踊研究会主催による研究発表と演奏会を開催する。アメリカ出身のソプラノ歌手・カッサード女史が《伊野波節》《ヒヤミカチ節》を歌唱した(東洋音楽学会編1952:96)。

楽譜集の出版前の1950年1月18日～19日、山内はNHKにより湛水流7曲を録音した。

1951年4月29日早稲田大学大隈講堂で「沖繩諸島の歌と踊の会」が開催された(後述)。本田安次の講演・解説、山内その他の沖繩出身者数十人が出演した。後日、NHKにより山内はオモロ、木遣、箏独奏曲を録音した。

文部省から研究費が交付されて以降、東洋音楽学会で積極的に研究発表を行うようになる。例えば、1950年東洋音楽学会第1回公開講演会(於:徳川邸内黎明講堂)にて琉球の音楽及舞踊を沖繩芸能保存会が実演し、解説を山内が行った(東洋音楽学会

表2 山内盛彬の年譜 (作成:高橋美樹)

西暦	元号	年齢(歳)	活動(演奏・研究・公演・出版・放送)
1890	明治23	0	3月9日那覇市首里金城町で山内盛明、徳平ウトの長男として誕生
1904	明治37	14	この頃より祖父・盛熹から湛水流、野村流の手ほどきを受ける
1908	明治41	18	4月沖縄師範学校に入学。7月山内鶴と結婚。
1910	明治43	20	20歳の頃、琉球王朝最後のおもろ主取・安仁屋真莉からおもろを採取し、その誦法を受け継ぐ。
1911	明治44	21	22歳(1911年)までに祖父から湛水流古典音楽全曲を伝授。20名の音楽家を招き野村流、湛水流の伝授披露宴開催
1912	明治45	22	3月沖縄師範学校卒業
1914	大正3	24	野村流、湛水流を再調査し洋楽譜と工工四併用の作譜を完成(湛水流工工四を五線譜化)
1915	大正4	25	西洋音楽を学ぶために上京、東洋音楽学校に入学。田辺尚雄に師事
1917	大正6	27	沖縄県宮城島の尋常小学校に勤務
1922	大正11	32	7月26日～30日、田辺尚雄が沖縄本島の音楽調査を実施。案内役は山内盛彬
1925	大正14	35	4月田辺は歌舞伎舞踊劇『与那国物語』(於:歌舞伎座)公演。山内は作曲、選曲、舞踊振付担当。 9月「啓明会第15回講演」(東京美術学校)「琉球の音楽に就きて」講演。山内は東京・京橋小学校に勤務。 11月8日JOAKラジオ「日本音楽史講座」田辺担当「第5回江戸時代の音楽(その1)」古典実演。 12月20日JOAKラジオ「日本音楽史講座」田辺担当「第11回箏曲の変遷」琉球八橋流箏曲を西平守保と実演。
1927	昭和2	37	8月13日:JOAKラジオ「民謡の夕」琉球及八重山群島民謡を演奏
1928	昭和3	38	1月民俗芸術の会(1927年7月発足)で「琉球音楽の演奏と解説」と題し講演
1929	昭和4	39	4月19日JOAK東京他《奄美節》《四季》《杜の苺》《四季口説》《取つたる金は》《与那国の小猫》演奏、放送。 5月ニッポン・レコードで「訳詩琉球民謡」4曲録音、SP発売は《与那国の小猫》《奄美節》。 10月松坂屋「琉球美術工芸品展覧会」にて27日「講演と舞踊音楽の会」「琉球民謡と舞踊」出演。
1930	昭和5	40	1月20日～28日三越「琉球展覧会」の演芸会「琉球民謡と舞踊」に出演
1934	昭和9	44	『山内伶見童謡曲集』シンフォニー楽譜出版社から刊行
1945	昭和20	55	9月30日田辺尚雄邸で会合。来会者は中島雅楽之都、山内盛彬、林謙三、岸辺成雄、吉川英士他
1946	昭和21	56	4月東京で沖縄古典音楽舞踊保存会設立(顧問:近衛秀麿,尚琳,山内盛彬,宮城聡,会長:東山寛賢,副会長:宮城裕)
1948	昭和23	58	東京音楽学校講堂にて「東洋音楽の5度旋法論」の研究発表、琉球古典音楽舞踊の実演
1949	昭和24	59	6月4日沖縄文化協会で講演「世界文化史に貢献するオモロの語り方」。 6月19日奥間徳一らの発起で出版後援会結成。山内の研究に文部省から研究費交付。 10月16日「琉球芸能会」徳川会館で山内盛彬の理論と研究を実演・発表(主催:山内盛彬後援会)
1950	昭和25	60	1月18日～19日コロムビア・レコードで湛水流7曲録音。文部省から山内の「琉球音楽の研究」に研究費補助金2万円交付。5月28日東洋音楽学会第1回総会・公開講演会(徳川邸内黎明講堂)琉球音楽及舞踊を沖縄芸能保存会が実演、山内は解説。『琉球の音楽 楽譜 第1集』出版。10月28日出版記念の研究発表・演奏会(東京基督教女子青年会館YWCA)(主催:沖縄音楽舞踊研究会)でカッサード女史《伊野波節》《ヒヤミカチ節》歌唱。
1951	昭和26	61	4月29日「沖縄諸島の歌と踊の会」(早稲田大学大隈講堂)本田安次の講演・解説、山内他沖縄出身者数十人出演。後日、NHKよりオモロ、木遣、箏独奏曲録音。6月渡米。南カルフォルニア大学で琉球音楽を講義並びに北米、南米、アフリカ、東南アジアを旅して民族音楽を調査。
1952	昭和27	62	論文「琉球音楽史略(1)」『東洋音楽研究』10・11号(東洋音楽学会)掲載。同誌には岸辺成雄による山内著『琉球の音楽 楽譜 第1集』書評も掲載。2月6日カルツ・ザックスの招きでニューヨークのパブリック・ライブラリーで一元論学説の発表と実演発表会。ベルーに渡り、4月2日ベルー新報と沖縄連盟共催の音楽会で公開演奏。7月26日ベルーからブラジルのサンパウロへ到着。
1954	昭和29	64	8月15日から8日間、ブラジルのサンパウロで開催された「第7回国際民族音楽会議」に日本代表として参加。「東洋旋法の一元論」発表。アルゼンチン、チリ、ボリビア、ベルーで調査。12月24日帰国。
1955	昭和30	65	2月12日東洋音楽学会第40回例会(日本工業倶楽部)で研究発表「南米民族音楽の調査研究」。6月25日～27日東洋音楽学会第6回大会(日本工業倶楽部)「琉球箏と筑紫箏の比較」で「対馬節」「滝落音攪」唄:高橋光子、箏:山内
1958	昭和33	68	論文「琉球音楽史略(2)」『東洋音楽研究』14・15号(東洋音楽学会)掲載
1959	昭和34	69	著書『琉球の音楽芸能史(民俗芸能全集)』第1巻を民俗芸能全集刊行会から出版。その後完結まで執筆に心血を注ぐ。出版祝賀会を日本青年館で開催。組踊「花売りの縁」上演。
1962	昭和37	72	田辺による山内著『琉球の音楽芸能史』(民俗芸能全集第1)書評『東洋音楽研究』16・17号(東洋音楽学会)掲載
1963	昭和38	73	7月28日-29日東洋音楽学会第14回大会(相愛女子大学音楽学部)研究発表「邦楽箏調子の組織的分離法」
1966	昭和41	76	沖縄タイムス賞(文化賞)受賞 10月1日-2日東洋音楽学会第17回大会(日本工業倶楽部)研究発表「邦楽陰性の発生に関する一考察」
1971	昭和46	81	日本雅楽会のゼミナールで琉球音楽について講演(東京霞山会館)、《十七八節》実演。御座楽を復曲演奏(都市センターホール)「おもろ」復元。10月再び要請受け、カリフォルニア大学等の講演のため渡米。その後ブラジルへ渡り7年間滞在。1971年～1977年北米とブラジルに滞在し民族音楽を研究。
1972	昭和47	82	勲4等瑞宝章、緑綬褒章を授かる
1975	昭和50	85	沖縄県文化功労賞を受賞
1978	昭和53	88	6月帰国。8月横浜で平光雄氏に湛水流を伝授。9月沖縄へ帰郷。
1981	昭和56	91	2月沖縄県無形文化財「王府おもろ」5曲6節の技能保持者に認定
1982	昭和57	92	11月山内を中心に琉球古典音楽湛水流伝統保存会結成、初代会長に推挙。 「御拝領工工四」ほか琉球音楽関係の稀書11冊を沖縄県に寄贈。
1983	昭和58	93	1月8日「第1回 琉球古典音楽 湛水流伝統保存会発表会」(於:沖縄タイムスホール) 当時の住所:沖縄市与儀453-1沖縄一条園(特別養護老人ホーム)
1986	昭和61	96	3月17日老衰のため埼玉県新越谷病院にて死去
1993	平成5		『山内盛彬著作集』第1巻～第3巻、沖縄タイムス社より刊行

編 1951:175-176)。1952年には論文「琉球音楽史略(1)」が『東洋音楽研究』10・11号(東洋音楽学会)に掲載される。学術論文として体裁を整えるため、音楽学者・岸辺成雄から指導を受けていた(岸辺 1993:1 参照)。

1952年岸辺による山内著『琉球の音楽 楽譜 第1集』の書評が『東洋音楽研究』10・11号(東洋音楽学会)に掲載される。1955年東洋音楽学会第6回大会(於:日本工業倶楽部)にて「筑紫箏特集」の「6、琉球箏と筑紫箏の比較」で《対馬節》《滝落菅攪》を唄:高橋史子、箏:山内盛彬で演奏した(東洋音楽学会編 1958:194-196)。1958年論文「琉球音楽史略(2)」が『東洋音楽研究』14・15号(東洋音楽学会)に掲載される。

本格的な著書は1959年『琉球の音楽芸能史(民俗芸能全集)』第1巻を民俗芸能全集刊行会から自費出版する。その後22巻の刊行まで執筆に心血を注ぐ。そして、1962年には恩師・田辺による『琉球の音楽芸能史』の書評が『東洋音楽研究』16・17号(東洋音楽学会)に掲載される。

1963年東洋音楽学会第14回大会(於:相愛女子大学音楽学部)にて山内は「邦楽箏調子の組織的分離法」の研究発表を行う(東洋音楽学会 2016:12-13)。1966年東洋音楽学会第17回大会(於:日本工業倶楽部)にて山内は「邦楽陰性の発生に関する一考察」の研究発表を行う(東洋音楽学会 2016:15-16)。

海外における演奏・研究活動は、上記の国内活動と相俟って行われた。

1951年南カリフォルニア大学等の招聘を受けアメリカに渡り、沖縄音楽の講義と山内の学説を発表した(山内 1980年10月23日参照)。1951年～1954年まで北米、南米、アフリカ、東南アジアなどを旅して民族音楽を調査した(山川編 1983:31)。1952年2月6日クルト・ザックスの招聘により、ニューヨーク公共図書館で一元論学説の発表と実演発表会を開催した。その後、ペルーに渡り、4月2日ペルー新報と沖縄連盟共催の音楽会で公開演奏を行い、7月26日ペルーからブラジルのサンパウロへ到着した(1952年5月5日『沖縄新民報』B)(1952年8月25日『沖縄新民報』4)。

1954年8月15日から8日間、ブラジルのサンパウロで開催された「第7回国際民族音楽会議」に日本代表として参加し「東洋旋法の一元論」を発表する。その後アルゼンチン、チリ、ボリビア、ペルーを調査した。それらの研究成果を1955年山内は東洋音楽学会第40回例会(於:日本工業倶楽部)で「南米民族音楽の調査研究」と題して発表する(東洋音楽学会 2017:4)。1971年再び要請を受けて、カリフォルニア大学等の講演のため渡米する。その後1971年～1977年までブラジルに滞在し、民族音楽を研究した(山川編 1983:31)。

1972年勲4等瑞宝章、緑綬褒章を授かる。1978年横浜で平光雄に湛水流を伝授した(新城・持田 1999c 参照)。1981年沖縄県無形文化財「王府おもろ」5曲6節の技能保持者に認定される。

1982年11月、山内を中心に有志が集まり琉球古典音楽湛水流伝統保存会を結成し、初代会長に推挙された。1986年3月17日、老衰のため埼玉県新越谷病院にて逝去した。

1.3.2 1950年NHK録音の位置付け

1950年NHKの録音は、山内が14歳～22歳まで祖父から伝授された湛水流古典音楽全曲をレコードという媒体に結実させたといえられる。湛水流の伝承者として音声記録を後世に残すという一大事業は、日本最初のラジオ局NHKと大手レコード会社のコロムビアによって実現した。そして、この録音は1950年以降、山内が日本国内外で研究発表、調査を勢力的に展開する前夜の功績として位置付けられる。

なお、1964年『民俗芸能全集 第4(琉球王朝古謡秘曲の研究)』は山内自身の演唱による王府おもろ(録音テープ)を付録として刊行された。

2. 1951年5月～6月沖縄本島・八重山諸島・伊江島の音楽を録音

国立国会図書館には1951年5月～6月沖縄本島・八重山諸島・伊江島の音楽をNHKが制作、日本コロムビアが録音・製造したSPレコード14枚が所蔵されている。この音源は1951年4月29日早稲田大学大隈講堂における「沖縄諸島の古謡と踊の会」(主催:民俗芸能の会)で上演した演目の中から22曲を選曲し、録音したものである。「昭和26年(1951):前年に続き、東京在住者による沖縄民謡を5月から6月にかけて収録した」(NHK「日本民謡大観」制作スタッフ編 1995:22)と記録がある。さらに、録音日程について、次のように記された。

◆昭和26年(1951)

◇5月18日、6月6日ほか 沖縄地方(東京在住)

NHK 小川昂(筆者注:正しくは昂)、塚田博(東京)

日本コロムビア 松岡醇三

演唱者 16名 収録曲数 34曲

(東京局、日本コロムビアで収録)

6月5日 八重山の唄

6月6日 沖縄本島の唄

6月12日 伊江島の唄

(NHK「日本民謡大観」制作スタッフ編 1995:78)

1951年5月18日に何を録音したかは不明である。だが、6月5日は八重山の唄、6月6日は沖縄本島の唄、6月12日は伊江島の唄と、各島々に分けて録音日を設定したことがわかる。また、1950年山内による録音と同様、NHKの小川と塚田、日本コロムビアの松岡がスタジオ録音に立ち会った。『NHK 民謡調査の記録:1939-1994』には録音地、曲目、歌唱・演奏者など調査の詳細

が記載されている。しかし、全国各地の民謡を現地で録音する手法を用いていたせい、レコード会社名の記録はない。日本コロムビアという録音スタジオの会社名が登場するのは、1950年～1951年沖縄音楽の録音記録のみである。

本節では2.1で「沖縄諸島の古謡と踊の会」の内容について整理した後、2.2でプログラムの演目と実際に録音された曲目を比較・照合する。

2.1 1951年4月29日「沖縄諸島の古謡と踊の会」開催

1951年4月29日「沖縄諸島の古謡と踊の会」が早稲田大学大隈講堂で開催された。本会を企画し、プログラムの編集及び歌詞解説を執筆した本田安次は「民俗芸能の会と演劇博物館の共催で」(本田1999:444)会を開催したと述べた。演劇博物館とは1928年に設立された早稲田大学演劇博物館のことだが、プログラムに演劇博物館の記載はない。

また、主催の民俗芸能の会とは1927年設立「民俗芸術の会」の延長として、戦後新たに創設された団体であり、民俗芸能を主な研究対象とする。1951年当時、本田は早稲田大学付属高等学院教諭・同大学文学部講師を務め、1950年10月以降は文化財保護審議会専門委員も担っていた。当日配布されたプログラムは、本田安次編集『沖縄の古謡と舞踊』³⁾(図1参照)というタイトルで民俗芸能の会から発行され、発行日は会の開催日1951年4月29日である。本田はプログラムの後記で次のように述べている。

短時日の間であったが、ともかく実演をともなったこれだけの資料を蒐め得たことを喜ぶ。沖縄の民俗舞踊については、久しくその様子を知らないと念願していたのであったが、この度その片かけをのぞき得たわけである。…中略…島々の歌謡の美しさについては、今更喋々を要しない。宮古島の歌などは、容易に聞く機会がない由であるが、此度沢山歌ってもらえるのも有難いことである(下線部筆者)(本田1951:48)。

本田は1928年日本青年館で開催された「第3回郷土舞踊と民謡の会」で八重山歌舞の美しさに深い感銘を受けて以来、1931年「琉球古典芸能大会」(主催:日本民俗協会)も観劇するなど(本田1991:1参照)沖縄の音楽・舞踊へ積極的に関わっていた。「沖縄諸島の古謡と踊の会」は本田が1949年に早稲田大学に赴任した翌年に開催された。

上記の「沖縄の民俗舞踊については、久しくその様子を知らないと念願していた」「宮古島の歌などは、容易に聞く機会がない」という文言からは、本田自身が観たい知りたい舞踊や歌を関東在住の沖縄出身者たちに上演してもらったとも捉えられる。

また、本田は本会について後年「沖縄の島々の古謡や古芸能を、乞うて在京の人たちに演じていただいたが、おもしろを始め、首里や伊江島のクエーナ、野遊びやアンガマ、宮古・八重山の童^{おらべ}う

たなど、珍しいものが数々出た」(本田1991:1)、「山内盛彬、池宮喜輝、渡嘉敷守良ら諸氏の参加も得て、当時尋ね得る限りの沖縄の代表的な歌舞を尽し、おもしろ、クエーナ、野遊びを含め、宮古、八重山の歌舞も、沖縄宮廷舞踊も、渡嘉敷氏指導による組踊『手水の縁』も演じられた」(本田1991:369-370)と記した。つまり、それまで東京ではほとんど上演されていなかった古謡、毛遊び歌、宮古・八重山諸島の芸能・歌など幅広い演目を舞台上に乗せることに成功したのである。

「沖縄諸島の古謡と踊の会」のプログラムは図2を参照されたい。演舞の前に河竹繁俊が挨拶をし、折口信夫が講演をした。なお、1部と2部の間に番外として空手の演舞がなされたが図2では割愛した。

2.2 「沖縄諸島の古謡と踊の会」に関する新聞記事

本会に関する新聞記事は『沖縄新民報』の2件である。1件目の冒頭は次の通りである。

沖縄諸島の古謡と舞踊の会は民族芸能会(ま)の主催で去る4月29日早稲田大学大隈講堂で賑かに午後1時から、けんらんたる幕を開いた。河竹繁俊氏は開会劈頭山内盛彬氏のたえざる協力を謝し、折口信夫博士の講演や本田安次氏の解説で沖縄芸能を正しく見て貰うならば日本芸能の、「ふるさと」を少しでも、よけいに学問することができ、新日本芸能の創造に大きな貢献をもたらすものと信ずる」と公演の趣旨を説明し、引き続き折口博士のうんちく深かき沖縄諸島の歌と踊りに関する講演に移った(下線部筆者)(1951a年5月15日『沖縄新民報』B)。

河竹はプログラムに下記の文章を寄せている。「山内盛彬氏のたえざる協力を謝し」については下記とほぼ同じ内容を話したと推察される。

山内盛彬さんが終始たゆまず、実によく面倒を見ておられるのは、はた目にもつくづく有難いことで、沖縄の芸能会が、かくりっぱな番組によって開催されることは、詳しい経過は知りませんが、山内さんなどのお蔭だと想像されます(河竹1951:1)。

河竹は関東沖縄音楽界における山内の貢献を讃えた。上記の記事では続けて2部構成による演目を紹介した。

2件目の記事も一部を抜粋して紹介する。

今回民族芸能会(ま)では、沖縄諸島の古謡と舞踊という新しい角度から早稲田大学大隈講堂で沖縄出身者に実演公開の機会を与え「沖縄芸能の正しい理解から日本芸能のふるさとをたずね、新日本芸能の創造へ拍車をかけた。これは日沖芸能交流に対する本年劈頭の跳躍ともいふべきであり郷土出身者がその意

図2 1951年4月29日「沖縄諸島の古謡と踊の会」プログラム(本田1951:i-ivから抜粋)

挨拶 河竹繁俊

講演 折口信夫

☆

第1部(古謡と民俗舞踊)

I 沖縄本島の歌と踊

1、おもろ 山内盛彬

首里王府のおもろ

祝女のおもろ

2、うすだいご歌 同上(筆者注:山内盛彬)

3、木遣 同上(筆者注:山内盛彬)

士族の木遣 百姓の木遣

4、琴独奏(仲風節) 山内盛彬

5、首里のくえーな

前原篤子、大里喜久子、見里春子、島袋愛子、宮城つる、眞喜屋俊子、山内つる、仲本秀子、上江洲芳子、屋部貞、米須京子、安良城初、富川栄子、高安よし、尚つる子、座間味磯、遠山静江、高里恭子

6、十七八ぶし 池宮喜輝

7、モウ遊びの歌と踊

仲井真宗一、米須清信、渡嘉敷三郎 他大勢

II 宮古島の歌と踊

1、正月のアーグ

2、根間の主

3、東里真中

4、豆が花

5、まむやがアーグ

6、とうがにー

7、狩侯のいさみが

8、多良間しよんがにー

9、よいてばよーいだき

10、くいちゃ踊

砂川貞子、宮国定隆、狩侯喜代、垣花元應、狩侯まつ、砂川玄教、葉山まつ子、狩侯恵昌、渡嘉敷節子、垣花伸直、山内雪子、葉山靖、山内すみ子、宮国泰俊、渡嘉敷のぶ子、渡嘉敷利秋

III 八重山(竹富)島の歌と踊

1、たらくじ節 内盛直夫、内盛かつ

2、イシャギョ船 ユンタ ジラバ 浅海弘重、内盛直夫

3、鳩間節 前新昌英、内盛かつ

4、祈雨歌 内盛直夫、浅海弘重

5、まみどうま(踊) 前新昌英、内盛かつ

6、とばるま節 内盛直夫、内盛かつ、栗盛マウシ

7、安里屋節 内盛直夫、内盛かつ

8、あんがま(盆踊) 大勢

IV 伊江島の歌

1、伊江島のくえーな

2、砂持節

3、ましゅんこ節

上里吉堯、名嘉原勉、内間武治、金城嘉代子、佐久川加奈子、長嶺かな子 (指導) 上里参治

第2部

V 歌舞

1、かぎやで風(老人踊) 渡嘉敷守良、渡嘉敷節子

2、瓦屋節(女踊) 亀川美年子、平良リエ子、

佐久川昌子、仲井間京子

3、上り口説(二才踊) 渡嘉敷守良

4、天川踊(雑踊) 男: 仲井間京子 女: 平良リエ子

5、しきだ盆節(女踊、八重山島) 内盛カツ、高嶺文子

6、高平萬歳 兄: 渡嘉敷利秋 弟: 渡嘉敷のぶ子

7、汀間節(雑踊) 亀川美年子、平良リエ子、

佐久川昌子、仲井間京子

8、組踊 手水の縁

山戸 佐久川昌子

玉津 平良リエ子

志喜屋の大屋子 渡嘉敷守良

山口の西掟 富濱宗平

門番 仲宗根忠治

右 音楽

(本島) (歌・三味線) 池宮喜輝、米須清仁、米須清昌、伊禮嘉長、渡嘉敷節子

(琴) 山入端つる (笛) 富濱宗平

(太鼓) 渡嘉敷亮

(八重山) (歌・三味線) 内盛直夫、浅海弘重

(太鼓) 瀬戸修 (着付) 迎里文雄

☆

解説 本田安次

気で忠実に演出したことは勿論であり古謡では甘美な旋律を舞踊では典雅な手振りを見せ都人の鑑賞を助けたことは 100%の成功を収めたものというべきであった(下線部筆者)(1951b 年 5月15日『沖縄新報』B)。

下線部はプログラムの「もとの有楽座で沖縄の民俗舞踊を見学した時にも、なるほど『日本芸能のふるさと』だなど感じた」(河竹 1951:1)と同趣旨の挨拶だと思われる。そして、記事でも演舞が「都人の鑑賞を助けたことは 100%の成功を収めたもの」と高い評価を示した。



図1 本田安次編輯 1951『沖繩の古謡と舞踊』表紙

2.3 「沖繩諸島の古謡と踊の会」演目とNHK録音曲目の比較

表3は国会図書館所蔵 1951年録音・沖縄本島・八重山諸島・伊江島のレコード14枚(全28トラック)をレーベル情報に基づき、まとめたものである。レコード番号はPR-995~PR-1008、全て両面盤で録音曲数は38曲1芸能である。収録曲を分析概念に基づきジャンル分類した結果、沖縄古謡13曲、沖縄民謡6曲、沖縄箏曲1曲、琉球古典音楽2曲、八重山民謡11曲、八重山の芸能1曲、八重山舞踊1曲、伊江島古謡1曲、伊江島民謡3曲となった。実際のSPは写真9~写真22を参照されたい。



写真9 山内盛彬 SP『おもろ(四種)』
コロムビア:PR-995:1951年



写真10 山内盛彬 SP『琴獨奏 仲風節(その一)』
コロムビア:PR-996:1951年



写真11 池宮喜輝 SP『十七八節』
コロムビア:PR-997:1951年



写真12 SP『もう遊びの歌と踊(その一)』
コロムビア:PR-998:1951年



写真15 SP『いしやぎよ船(その一)』
コロムビア:PR-1001:1951年



写真13 SP『首里のくえーな(その一)』
コロムビア:PR-999:1951年



写真16 SP『とばるま』
コロムビア:PR-1002:1951年



写真14 SP『たらくじ節(その一)』
コロムビア:PR-1000:1951年



写真17 SP『安里屋節』
コロムビア:PR-1003:1951年



写真 18 SP 『しきだ盆節(その一)』
コロムビア:PR-1004:1951年



写真 21 SP 『伊江島のくえーな』
コロムビア:PR-1007:1951年



写真 19 SP 『仲筋のぬべま』
コロムビア:PR-1005:1951年



写真 22 SP 『ましゅんこ節』
コロムビア:PR-1008:1951年



写真 20 SP 『あんがま(盆踊)』
コロムビア:PR-1006:1951年

次に、本会の演目と NHK 録音の曲目を比較するために、表4「沖縄諸島の古謡と踊の会」演目と NHK 録音曲目の比較を作成した。

「沖縄諸島の古謡と踊の会」の演目 36 曲 2 芸能 1 作品を分析概念に基づきジャンル分類した結果、沖縄古謡 6 曲、沖縄民謡（モウ遊びの歌と踊）は曲数不明、沖縄箏曲 1 曲、琉球古典音楽 1 曲、琉球舞踊 6 曲、宮古民謡 9 曲、宮古の芸能 1 曲、八重山民謡 9 曲、八重山の芸能 1 曲、八重山舞踊 1 曲、伊江島古謡 1 曲、伊江島民謡 2 曲、組踊 1 作品となった。

まず録音楽曲を比較した結果、会では演奏されず NHK で録音した曲は以下の通りである。

- ◆琉球古典音楽《干瀬節》池宮喜輝
- ◆八重山民謡《仲筋のぬべま》《きりりあよう》《新屋のうまんたが》内盛直夫・浅海弘重・内盛カツ・栗盛茂子
- ◆伊江島民謡《きいふうぞう》水野嘉子・儀間歌子・上里参治

一方、会で演奏されたが、NHK で録音しなかった曲は以下の通りである。

- ◆琉球古典音楽《鳩間節》
- ◆宮古民謡《正月のアーグ》《根間の主》《東里真中》《豆が花》《まむやがアーグ》《とうがりに》《狩侯のいさみが》《多良間しよんがりに》《よいてばよーいだし》
- ◆宮古の芸能《くいちゃ踊》
- ◆琉球舞踊《かぎやで風(老人踊)》《瓦屋節(女踊)》《上り口説(二才踊)》《天川踊(雑踊)》《高平萬歳》《汀間節(雑踊)》
- ◆組踊「手水の縁」

会で上演された宮古民謡と宮古の芸能は全て録音に至っていない。なぜ録音しなかったのか、その理由は不明である。また、本会における琉球舞踊と組踊の地謡は池宮喜輝、米須清仁、米須清昌、伊禮嘉長、渡嘉敷節子、山入端つる、富濱宗平、渡嘉敷亮が担当した。NHK の録音では池宮が琉球古典音楽 2 曲を演奏し、渡嘉敷亮、富濱宗平、山ノ端ツルの 3 名は「もう遊びの歌と踊」を演奏した。沖縄本島の唄は 6 月 6 日に録音したが、録音が 1 日に限定されていたのか、琉球舞踊と組踊は録音に至っていない。

一方、本会における八重山舞踊の地謡は内盛直夫、浅海弘重、瀬戸修が担当した。だが、NHK 録音では内盛直夫、内盛カツ、栗盛茂子が参加したため、《しきだ盆節》を録音した。

次に双方の演奏者について比較した。

「沖縄諸島の古謡と踊の会」演目 → NHK 録音
《首里のくえーな》18 名 → 3 名

《モウ遊びの歌と踊》

仲井真宗一、米須清信 → 富濱宗平、米須清仁、
渡嘉敷三郎他大勢 → 山ノ端ツル、渡嘉敷亮

「八重山民謡」

浅海弘重、内盛直夫、内盛かつ → 浅海弘重、内盛直夫、内盛かつ
栗盛マウシ、前新昌英 → 栗盛茂子

「八重山舞踊」

内盛カツ、高嶺文子 → 内盛カツ、栗盛茂子、内盛直夫

「伊江島古謡」「伊江島民謡」

上里参治、上里吉堯、名嘉原勉 → 上里参治、水野嘉子、儀間歌子
内間武治、金城嘉代子、
佐久川加奈子、長嶺かな子

共通しているのは「八重山民謡」の浅海、内盛直夫、内盛かつ、「八重山舞踊」の内盛カツ、「伊江島古謡」「伊江島民謡」の上里参治のみである。本会と NHK 録音とは演奏者が大幅に変更されている。

3. 「沖縄民俗芸能」川崎市・神奈川県無形文化財指定の経緯

沖縄民俗芸能は 1952 年に川崎市の無形文化財に、1954 年には神奈川県無形文化財に指定され、1976 年には神奈川県の無形民俗文化財に指定された。指定された沖縄民俗芸能とは組踊、舞踊、琉球古典音楽の楽曲(後述)を指し、保存団体は川崎沖縄芸能研究会(1950 年発足)である。指定に至った経緯を調査する過程で、下記の記述が見つかった。

文化財に指定された直接の動機は早稲田大学芸部(本田安次教授指導)が昭和 25 年同大学大隈講堂で約 4 時間にわたり琉球芸能の発表会を催したのが参観者に深い感銘を与えたため(下線部筆者)(1954 年 4 月 10 日『琉球新報』夕刊:2)

上記の「琉球芸能の発表会」とは 2 で述べた 1951 年 4 月 29 日「沖縄諸島の古謡と踊の会」を指す。「昭和 25 年」とあるが「昭和 26 年」の間違いであろう。

本節では沖縄民俗芸能が川崎市・神奈川県無形文化財に指定された経緯を辿る。3.1 では東京・沖縄芸能保存会が 1948 年に発足するまでの動向を整理する。3.2 では保存会から分裂して 1950 年に川崎沖縄芸能研究会が結成された経緯を整理する。さらに、指定に多大な役割を果たした古江亮仁(1952 年当時:川崎市教育委員会文化財保護調査嘱託)、永田衛吉(1954 年当時:神奈川県文化財審議会無形文化財専門委員)、本田安次(1950-1986 年まで文部省文化財保護審議会専門委員)の動向にも言及する。

なお、関東における沖縄音楽・芸能団体の活動については、表 5「関東(東京・川崎・鶴見)における沖縄音楽・芸能団体・関連年表」を参照されたい。

表3 1951年NHK録音・沖縄本島・八重山諸島・伊江島の音楽レコード (作成:高橋美樹)

録音年月	曲名	歌手・演奏者	レコード番号	制作	製造元
1951年6月	おもろ(四種) 1. 首里王府のおもろ. 2. のろのおもろ(a. 恩納のろの山うむい, b. 恩納のろの船うむい, c. 國頭奥間のうすだいこ「虎頭山節」)	沖縄本島 山内盛彬	PR-995(1P3774)	NHK	コロムビア
1951年6月	木遣(四種) 那覇の土族木遣・那覇の百姓木遣・首里の土族木遣・國頭の百姓木遣	沖縄本島 山内盛彬	PR-995(2P3775)	NHK	コロムビア
1951年6月	琴獨奏 仲風節(その一)	沖縄本島 山内盛彬	PR-996(1P3772)	NHK	コロムビア
1951年6月	琴獨奏 仲風節(その二)	沖縄本島 山内盛彬	PR-996(2P3773)	NHK	コロムビア
1951年6月	十七八節	沖縄本島 唄と三味線:池宮喜輝	PR-997(1P3759)	NHK	コロムビア
1951年6月	干瀬節	沖縄本島 唄と三味線:池宮喜輝	PR-997(2P3760)	NHK	コロムビア
1951年6月	もう遊びの歌と踊(その一) (な〜くんに一節・たこ〜山節・あっちゃめ一節)	沖縄本島 唄:富濱宗平・山ノ端ツル, 唄と三味線:米子清仁, 太鼓:渡嘉敷亮	PR-998(1P3758)	NHK	コロムビア
1951年6月	もう遊びの歌と踊(その二) (山原汀間と節・はんだ原節・な〜くんに一節)	沖縄本島 唄:渡嘉敷亮・富濱宗平, 唄と三味線:山ノ端ツル	PR-998(2P3761)	NHK	コロムビア
1951年6月	首里のく〜な(その一) (大城く〜な・うりじんぐ〜な)	沖縄本島 見里春子・島袋愛子・眞喜屋俊子	PR-999(1P3776)	NHK	コロムビア
1951年6月	首里のく〜な(その二) (だんじゅかりゆしゃ・ひやう)	沖縄本島 見里春子・島袋愛子・眞喜屋俊子	PR-999(2P3777)	NHK	コロムビア
1951年6月	たらくじ節(その一)(たらくじ)	八重山島 唄:内盛カツ, 唄と三味線:内盛直夫	PR-1000(1P3790)	NHK	コロムビア
1951年6月	たらくじ節(その二)(九年母玉)	八重山島 唄:内盛カツ・粟盛茂子, 唄と三味線:内盛直夫	PR-1000(2P3791)	NHK	コロムビア
1951年6月	いしゃぎょ船(その一)(ユンタ)	八重山島 内盛直夫・浅海弘重	PR-1001(1P3778)	NHK	コロムビア
1951年6月	いしゃぎょ船(その二)(ジラバ)	八重山島 内盛直夫・浅海弘重	PR-1001(2P3779)	NHK	コロムビア
1951年6月	雨乞歌	八重山島 内盛直夫(太鼓つき)	PR-1002(1P3786)	NHK	コロムビア
1951年6月	とばるま(別名「かぬしゃま」)	八重山島 唄:内盛カツ・粟盛茂子, 唄と三味線:内盛直夫	PR-1002(2P3787)	NHK	コロムビア
1951年6月	安里屋節(本歌)	八重山島 唄:内盛カツ・粟盛茂子, 唄と三味線:内盛直夫	PR-1003(1P3788)	NHK	コロムビア
1951年6月	まみどうま	八重山島 唄と三味線:内盛直夫, 唄:内盛カツ, はやし:粟盛茂子	PR-1003(2P3789)	NHK	コロムビア
1951年6月	しきだ盆節(その一)	八重山島 唄:内盛カツ・粟盛茂子, 唄と三味線:内盛直夫	PR-1004(1P3780)	NHK	コロムビア
1951年6月	しきだ盆節(その二)	八重山島 唄:内盛カツ・粟盛茂子, 三味線とはやし:内盛直夫	PR-1004(2P3781)	NHK	コロムビア
1951年6月	仲筋のぬべま	八重山島 唄:内盛カツ・粟盛茂子, 唄と三味線:内盛直夫	PR-1005(1P3782)	NHK	コロムビア
1951年6月	きるりあよう	八重山島 内盛直夫・浅海弘重	PR-1005(2P3783)	NHK	コロムビア
1951年6月	新屋のうまんたが	八重山島 唄:内盛カツ・粟盛茂子・浅海弘重, 唄と三味線:内盛直夫	PR-1006(1P3785)	NHK	コロムビア
1951年6月	あながま(盆踊)	八重山島 唄:内盛カツ・粟盛茂子, 三味線:内盛直夫	PR-1006(2P3784)	NHK	コロムビア
1951年6月	伊江島のく〜な	伊江島 唄:水野嘉子・儀間歌子, 鼓:上里参治	PR-1007(1P3798)	NHK	コロムビア
1951年6月	砂持節	伊江島 唄:水野嘉子・儀間歌子, 唄と三味線:上里参治	PR-1007(2P3796)	NHK	コロムビア
1951年6月	ましゅんこ節	伊江島 唄:水野嘉子・儀間歌子, 三味線:上里参治	PR-1008(1P3797)	NHK	コロムビア
1951年6月	きいふうぞう	伊江島 唄:水野嘉子・儀間歌子, 口三味線:上里参治	PR-1008(2P3799)	NHK	コロムビア

表4 「沖縄諸島の古謡と踊の会」演目とNHK録音曲目の比較 (作成:高橋美樹)

【注】分析ジャンルのゴシック体は録音曲

分析ジャンル	「沖縄諸島の古謡と踊の会」演目	「沖縄諸島の古謡と踊の会」出演者	レコードの曲名	レコードの歌手・演奏者	レコード番号
沖縄古謡	首里王府のおもろ、祝女のおもろ/ うすだいこ歌	山内盛彬	おもろ(四種) 首里王府のおもろ・のろのおもろ 恩納のろの山うむい・恩納のろの船うむい・國頭奥間のうすだいこ「虎頭山節」	沖縄本島 山内盛彬	PR-995 (1P3774)
沖縄古謡	士族の木遣、百姓の木遣	山内盛彬	木遣(四種) 那覇の士族木遣・那覇の百姓木遣・首里の士族木遣・國頭の百姓木遣	沖縄本島 山内盛彬	PR-995 (2P3775)
沖縄箏曲	琴独奏(仲風節)	山内盛彬	琴獨奏 仲風節(その一)	沖縄本島 山内盛彬	PR-996 (1P3772)
沖縄箏曲	琴独奏(仲風節)	山内盛彬	琴獨奏 仲風節(その二)	沖縄本島 山内盛彬	PR-996 (2P3773)
沖縄古謡	首里のくえーな	前原篤子, 大里喜久子, 見里春子, 島袋愛子, 宮城つる, 眞喜屋俊子, 山内つる, 仲本秀子, 上江洲芳子, 屋部貞, 米須京子, 安良城初, 富川栄子, 高安よし, 尚つる子, 座間味磯, 遠山静江, 高里恭子	首里のくえーな(その一) (大城くえーな・うりじんぐえーな)	沖縄本島 見里春子・島袋愛子・眞喜屋俊子	PR-999 (1P3776)
沖縄古謡	首里のくえーな	前原篤子, 大里喜久子, 見里春子, 島袋愛子, 宮城つる, 眞喜屋俊子, 山内つる, 仲本秀子, 上江洲芳子, 屋部貞, 米須京子, 安良城初, 富川栄子, 高安よし, 尚つる子, 座間味磯, 遠山静江, 高里恭子	首里のくえーな(その二) (だんじゅかりゆしゃ・ひやう)	沖縄本島 見里春子・島袋愛子・眞喜屋俊子	PR-999 (2P3777)
琉球古典音楽	十七八ぶし	池宮喜輝	十七八節	沖縄本島 唄と三味線:池宮喜輝	PR-997 (1P3759)
琉球古典音楽			干瀬節	沖縄本島 唄と三味線:池宮喜輝	PR-997 (2P3760)
沖縄民謡	モウ遊びの歌と踊	仲井真宗一, 米子清信, 渡嘉敷三郎 他大勢	もう遊びの歌と踊(その一) (な〜くんに一節・たこー山節・あっちゃめ一節)	沖縄本島 唄:富濱宗平・山ノ端ツル, 唄と三味線:米子清仁, 太鼓:渡嘉敷亮	PR-998 (1P3758)
沖縄民謡	モウ遊びの歌と踊	仲井真宗一, 米子清信, 渡嘉敷三郎 他大勢	もう遊びの歌と踊(その二) (山原汀間と節・はんた原節・な〜くんに一節)	沖縄本島 唄:渡嘉敷亮・富濱宗平, 唄と三味線:山ノ端ツル	PR-998 (2P3761)
宮古民謡	正月のアーグ	砂川貞子, 宮国定隆, 狩俣喜代, 垣花元應, 狩俣まつ, 砂川玄教, 葉山まつ子, 狩俣恵昌, 渡嘉敷節子, 垣花伸直, 山内雪子, 葉山靖, 山内すみ子, 宮国泰俊, 渡嘉敷のぶ子, 渡嘉敷利秋			
宮古民謡	根間の主	砂川貞子, 宮国定隆, 狩俣喜代, 垣花元應, 狩俣まつ, 砂川玄教, 葉山まつ子, 狩俣恵昌, 渡嘉敷節子, 垣花伸直, 山内雪子, 葉山靖, 山内すみ子, 宮国泰俊, 渡嘉敷のぶ子, 渡嘉敷利秋			
宮古民謡	東里真中	砂川貞子, 宮国定隆, 狩俣喜代, 垣花元應, 狩俣まつ, 砂川玄教, 葉山まつ子, 狩俣恵昌, 渡嘉敷節子, 垣花伸直, 山内雪子, 葉山靖, 山内すみ子, 宮国泰俊, 渡嘉敷のぶ子, 渡嘉敷利秋			
宮古民謡	豆が花	砂川貞子, 宮国定隆, 狩俣喜代, 垣花元應, 狩俣まつ, 砂川玄教, 葉山まつ子, 狩俣恵昌, 渡嘉敷節子, 垣花伸直, 山内雪子, 葉山靖, 山内すみ子, 宮国泰俊, 渡嘉敷のぶ子, 渡嘉敷利秋			
宮古民謡	まむやがアーグ	砂川貞子, 宮国定隆, 狩俣喜代, 垣花元應, 狩俣まつ, 砂川玄教, 葉山まつ子, 狩俣恵昌, 渡嘉敷節子, 垣花伸直, 山内雪子, 葉山靖, 山内すみ子, 宮国泰俊, 渡嘉敷のぶ子, 渡嘉敷利秋			
宮古民謡	とうがにー	砂川貞子, 宮国定隆, 狩俣喜代, 垣花元應, 狩俣まつ, 砂川玄教, 葉山まつ子, 狩俣恵昌, 渡嘉敷節子, 垣花伸直, 山内雪子, 葉山靖, 山内すみ子, 宮国泰俊, 渡嘉敷のぶ子, 渡嘉敷利秋			
宮古民謡	狩俣のいさみが	砂川貞子, 宮国定隆, 狩俣喜代, 垣花元應, 狩俣まつ, 砂川玄教, 葉山まつ子, 狩俣恵昌, 渡嘉敷節子, 垣花伸直, 山内雪子, 葉山靖, 山内すみ子, 宮国泰俊, 渡嘉敷のぶ子, 渡嘉敷利秋			
宮古民謡	多良間しょんがにー	砂川貞子, 宮国定隆, 狩俣喜代, 垣花元應, 狩俣まつ, 砂川玄教, 葉山まつ子, 狩俣恵昌, 渡嘉敷節子, 垣花伸直, 山内雪子, 葉山靖, 山内すみ子, 宮国泰俊, 渡嘉敷のぶ子, 渡嘉敷利秋			

宮古民謡	よいてばよーいだき	砂川貞子, 宮国定隆, 狩俣喜代, 垣花元應, 狩俣まつ, 砂川玄教, 葉山まつ子, 狩俣恵昌, 渡嘉敷節子, 垣花伸直, 山内雪子, 葉山靖, 山内すみ子, 宮国泰俊, 渡嘉敷のぶ子, 渡嘉敷利秋			
宮古の芸能	くいちゃ踊	砂川貞子, 宮国定隆, 狩俣喜代, 垣花元應, 狩俣まつ, 砂川玄教, 葉山まつ子, 狩俣恵昌, 渡嘉敷節子, 垣花伸直, 山内雪子, 葉山靖, 山内すみ子, 宮国泰俊, 渡嘉敷のぶ子, 渡嘉敷利秋			
八重山民謡	たらくじ節	内盛直夫, 内盛かつ	たらくじ節(その一) (たらくじ)	八重山島 唄:内盛カツ, 唄と三味線:内盛直夫	PR-1000 (1P3790)
八重山民謡	たらくじ節	内盛直夫, 内盛かつ	たらくじ節(その二) (九年母玉)	八重山島 唄:内盛カツ・ 栗盛茂子, 唄と三味線:内 盛直夫	PR-1000 (2P3791)
八重山民謡	イシャギョ船 ユンタ	浅海弘重, 内盛直夫	いしゃぎょ船(その一) (ユンタ)	八重山島 内盛直夫・浅 海弘重	PR-1001 (1P3778)
八重山民謡	イシャギョ船 ジラバ	浅海弘重, 内盛直夫	いしゃぎょ船(その二) (ジラバ)	八重山島 内盛直夫・浅 海弘重	PR-1001 (2P3779)
琉球古典音楽	鳩間節	前新昌英, 内盛かつ			
八重山民謡	祈雨歌	内盛直夫, 浅海弘重	雨乞歌	八重山島 内盛直夫(太鼓 つき)	PR-1002 (1P3786)
八重山民謡	とばるま節	内盛直夫, 内盛かつ, 栗盛マウシ	とばるま (別名「かぬしゃま」)	八重山島 唄:内盛カツ・ 栗盛茂子, 唄と三味線:内 盛直夫	PR-1002 (2P3787)
八重山民謡	まみどうま(踊)	前新昌英, 内盛かつ	まみどうま	八重山島 唄と三味線:内 盛直夫, 唄:内盛カツ, は やし:栗盛茂子	PR-1003 (2P3789)
八重山民謡	安里屋節	内盛直夫, 内盛かつ	安里屋節(本歌)	八重山島 唄:内盛カツ・ 栗盛茂子, 唄と三味線:内 盛直夫	PR-1003 (1P3788)
八重山民謡			仲筋のぬべま	八重山島 唄:内盛カツ・ 栗盛茂子, 唄と三味線:内 盛直夫	PR-1005 (1P3782)
八重山民謡			きりりあよう	八重山島 内盛直夫・浅 海弘重	PR-1005 (2P3783)
八重山民謡			新屋のうまんたが	八重山島 唄:内盛カツ・ 栗盛茂子・浅海弘重, 唄 と三味線:内盛直夫	PR-1006 (1P3785)
八重山の芸能	あながま(盆踊)	大勢	あながま(盆踊)	八重山島 唄:内盛カツ・ 栗盛茂子, 三味線:内盛直 夫	PR-1006 (2P3784)
伊江島古謡	伊江島のくえーな	(指導:上里参治)上里吉堯, 名嘉原勉, 内間武治, 金城嘉代子, 佐久川加奈子, 長 嶺かな子	伊江島のくえーな	伊江島 唄:水野嘉子・儀 間歌子, 鼓:上里参治	PR-1007 (1P3798)
伊江島民謡	砂持節	(指導:上里参治)上里吉堯, 名嘉原勉, 内間武治, 金城嘉代子, 佐久川加奈子, 長 嶺かな子	砂持節	伊江島 唄:水野嘉子・儀 間歌子, 唄と三味線:上里 参治	PR-1007 (2P3796)
伊江島民謡	ましゅんこ節	(指導:上里参治)上里吉堯, 名嘉原勉, 内間武治, 金城嘉代子, 佐久川加奈子, 長 嶺かな子	ましゅんこ節	伊江島 唄:水野嘉子・儀 間歌子, 三味線:上里参治	PR-1008 (1P3797)
伊江島民謡			きいふうぞう	伊江島 唄:水野嘉子・儀 間歌子, 口三味線:上里参 治	PR-1008 (2P3799)
琉球舞踊	かぎやで風(老人踊)	渡嘉敷守良, 渡嘉敷節子			
琉球舞踊	瓦屋節(女踊)	亀川美年子, 平良リエ子, 佐久川昌子, 仲 井間京子			
琉球舞踊	上り口説(二才踊)	渡嘉敷守良			
琉球舞踊	天川節(雑踊)	男:仲井間京子, 女:平良リエ子			
八重山舞踊	しきだ盆節(女踊, 八重山島)	内盛カツ, 高嶺文子	しきだ盆節(その一)	八重山島 唄:内盛カツ・ 栗盛茂子, 唄と三味線:内 盛直夫	PR-1004 (1P3780)
八重山舞踊	しきだ盆節(女踊, 八重山島)	内盛カツ, 高嶺文子	しきだ盆節(その二)	八重山島 唄:内盛カツ・ 栗盛茂子, 唄と三味線:内 盛直夫	PR-1004 (2P3781)
琉球舞踊	高平萬歳	兄:渡嘉敷利秋, 弟:渡嘉敷のぶ子			
琉球舞踊	汀間節(雑踊)	亀川美年子, 平良リエ子, 佐久川昌子, 仲 井間京子			
組踊	組踊「手水の縁」	佐久川昌子, 平良リエ子, 渡嘉敷守良, 富 濱宗平, 仲宗根忠治, 池宮喜輝, 米子清 仁, 米子清昌, 伊禮嘉長, 渡嘉敷節子, 山 入端つる, 渡嘉敷亮, 内盛直夫, 浅海弘 重, 瀬戸修, 迎里文雄			

3.1 1948年「東京・沖縄芸能保存会」結成

東京・沖縄芸能保存会発足について整理する前に、発足の直接の動機となった2人の動向について整理する。2人とは、九州に疎開していた琉球古典音楽演奏家の池宮喜輝(1886-1967:戦後池宮城から池宮へ改姓)と琉球舞踊家・俳優の渡嘉敷守良(1880-1953)である。上京後、1951年「沖縄諸島の古謡と踊の会」に池宮は《十七八節》の独唱及び地謡として、渡嘉敷は琉球舞踊と組踊に出演していた。

池宮は那覇市若狭町町内会長であった1944年85名の集団疎開団長として宮崎県に集団疎開した後、1946年古堅盛保、真境名由康、金武良章、新垣澄子らと共に慰問芸能団を組織し、九州各地に疎開した沖縄県出身者を慰問した(1958年10月4日『琉球新報』3参照)。

一方、渡嘉敷は1945年平安山栄太郎らの劇団が解散した後、九州に移住し、1947年頃、鹿児島市で舞踊の指導を始めた(池宮1954年2月20日:4参照)。しかし、渡嘉敷が諸事情により沖縄へ帰郷するという便りが舞い込み、慌てた池宮は「終戦後のどさくさが幾分常態に復するのを待って守良さんとともに一度上京して見たいと考えていた(筆者注:ため)…中略…旧知の比嘉良篤、照屋林仁、渡久地政芳諸氏に対し渡嘉敷さんと2人で舞踊紹介のため上京したいが貴地の状況を知らせて貰いたいと照会の書面を差し出した」(池宮1954年2月20日:4)。その後、受諾の知らせを受け、2人は1947年「東京・芝労働会館で慰安公演を行った。招聘したのは東京にある沖縄財団である。財団は、沖縄は戦争で激しい痛手を負っていたため、芸能が減ってしまうだろうと危惧していた。そこで守良にこのまま東京に残り、芸能保存会の立ち上げに協力してほしいと依頼した」(波照間2007:65)。そして、沖縄財団は1948年5月、東京・沖縄芸能保存会の前身である沖縄芸能保存会を設立した(波照間2007:65参照)。場所は東京丸の内ビル6階627号室であった。

沖縄芸能保存会の目的と会員について、次の記録がある。

沖縄古典音楽舞踊、組踊等の諸記録の作成、研究を初めとして、之に附帯する衣裳、道具、楽器、文献の蒐集保存を目的とし、経費は会費や寄付口を、もってあてることとなっている。師範には踊に渡嘉敷守良、歌に池宮喜輝、大阪の又吉氏等を迎え記録は、山内盛彬、武元朝朗氏等があたることとなっている。会長伊江朝助、副会長比嘉良篤、幹事武元山内外十氏、顧問には折口信夫、柳田国男、東恩納寛惇、漢那憲和、神山政良、田辺尚雄、高嶺明達、仲原善忠、柳宗悦、大浜信泉、尚琳、銘苺正太郎の諸家が就任した(事務所東京丸ビル627号)(下線部筆者)(1948年7月15日『沖縄新民報』B)。

沖縄芸能保存会は「在京の沖縄ゆかりの有識者が支援し

(2018年3月2日『東京新聞』)、顧問には沖縄の民俗・芸能研究に携わる折口信夫、柳田国男も名を連ねている。

池宮と渡嘉敷は1948年3月九州を引き揚げ、池宮は神奈川県川崎市に、渡嘉敷は横浜市鶴見区に居住することになった(池宮1954年2月20日:4参照)。この時、渡嘉敷の舞踊の弟子である児玉清子も共に鹿児島から上京した(波照間2007:65参照)。

沖縄芸能保存会は1948年11月9～11日「第1回公演」(於:読売会館ホール)を開催し、組踊「執心鐘入」の他、数々の琉球舞踊を披露した。地謡として、三線は池宮、又吉榮義、武元朝朗、山内盛彬、米須清昌、宮里良雄、亀川盛要、渡嘉敷亮他、琴は山入端鶴子、胡弓は亀川盛要、笛は島袋全章他、太鼓は島正太郎が担当した。

翌1949年11月15日には「沖縄芸能保存会 第2回公演」(於:日比谷公会堂)を開催し、組踊「銘苺子」、豊年踊り、歌劇「上巳節(あかまた一)」や舞踊を上演した。文部省主催芸術祭に参加した同公演の地謡として、三線は池宮、山内、武元、米須清仁、島袋全章、米須清昌、亀川、渡嘉敷節子他、琴は山入端、胡弓は亀川、笛は富浜宗平他、太鼓は渡嘉敷が演奏した。

1950年6月には「沖縄芸能保存会 第3回公演」(於:読売会館ホール)を開催し、「琉球の古い踊りと、近代バレエとの結びつきを試みた新作舞踊劇」(東京・沖縄芸能保存会編2007:58)「宮古島縁起」(作:石野圭一郎)を上演した。演出は篠崎正義、振付けは渡嘉敷守良、作曲・編曲は金井喜久子、三線は池宮が担い、YMCA管弦楽団が演奏した(東京・沖縄芸能保存会編2007:58参照)。この画期的な試みは伊江会長が辞退した後、沖縄芸能保存会会長に就任した比嘉良篤(東京急行電鉄株式会社取締役/東映株式会社顧問)の次のような考えが反映されたものだった。

一昨年5月東京で沖縄芸能保存会を組織し渡嘉敷の舞踊、池宮城の三味線を中心に多数の女子を養成し東京文化人への紹介を心掛け昨秋の大公演の外に各種文化団体の招きに応じて小公開を十すう回演じて参りましたが意外に大好評で予期以上の効果を挙げて居ります。然し年月が経つにつれ琉球舞踊の在り方について疑念を持つようになりました…中略…懐古趣味、旧型温存の意味ならこれでよいが新しい進路を見出さない以上、だんだん減びて行くような気がします(下線部筆者)(比嘉1950年9月3日:4)。

その後、「会が隆盛になると比嘉氏はこの会を興行化するハラがあるとのうわさがたち」(1952年6月30日『毎日新聞』)、沖縄芸能保存会は分裂するに至った。噂の真偽は不明だが、池宮と渡嘉敷を師範役として川崎で新たに沖縄芸能研究会が創設された。なお、池宮は「比嘉会長が私財を惜まず渡嘉敷さんの生活費を保償し保存会の発展に貢献された事実を見逃してはならぬ」(池宮1954年2月20日『琉球新報』4)と述べ、比嘉の貢献度の

高さを認めている。

3.2 1950年「川崎沖縄芸能研究会」結成

初めに川崎市と沖縄出身者の関わりについて述べる。「川崎に工場が進出し、工業都市としての歩みが始まったのは明治40年代のことである」(川崎市市民ミュージアム編2008:80)。数多くの「工場ができ、臨海部の埋立によって京浜工業地帯が形成されていった…中略…なかでも富士瓦斯紡績川崎工場は、その労働者の大部分が女性であり、およそ2000名が紡績機で綿糸を生産する作業に従事し…中略…その多くは、地方から出稼ぎにきた若い女子であり、大正4年(1915)の操業当初から沖縄県出身者が3割近くを占めていたと推測される」(川崎市市民ミュージアム編2008:80)。

1924年には「川崎の地に最初の沖縄県人会が発足し…中略…発会式では数名が舞踊を踊って祝った」(川崎市市民ミュージアム編2008:81)。1956年川崎沖縄県人会が再発足した後、1971年公益法人として神奈川県知事の認可を受け、財団法人神奈川県沖縄協会となった(川崎市市民ミュージアム編2008:81参照)。「現在、川崎区中島2丁目に『川崎沖縄労働文化会館』があり、沖縄県人会と沖縄芸能研究会の活動の拠点となっている」(川崎市市民ミュージアム編2008:81)。

川崎沖縄芸能研究会の結成時期に関して複数の記録がみられる。川崎沖縄芸能研究会のHPや石野1969:269には「1949年」発足、1953年8月2日『沖縄タイムス』3、新城・持田1999a:19には「1950年」発足との記述がある。しかし、池宮は1950年1月5日『沖縄新民報』Cに「[名刺紙上交換会]池宮城喜輝(沖縄芸能保存会師範)神奈川県川崎市中島町2-419」と掲載し、1950年2月5日『沖縄新民報』Aには沖縄芸能保存会の広告「研究生募集(月謝不要)／亡び去らんとする沖縄芸能を守り保存に熱意ある人、男女共に募集す、師匠渡嘉敷、池宮城両氏懇切に指導す」と記載がある。記事掲載の1950年1月～2月時点において、池宮と渡嘉敷は沖縄芸能保存会に所属しており、会を離れたのはそれ以降だと考えられる。よって、本論では川崎沖縄芸能研究会の発足年を1950年とする。

川崎沖縄芸能研究会の発足について同HPには次のように記された。

米須清仁、金城時男、亀川盛安氏らが中心となって川崎沖縄芸能研究会発足。初代会長に米須清仁氏就任。会員数は数十名、野村流師範池宮喜輝、組踊・舞踊の名優渡嘉敷守良の両師匠を指導者としてお迎えした⁴⁾。

沖縄芸能保存会の結成に多大な功績を残した池宮と渡嘉敷が、活動の拠点を川崎沖縄芸能研究会に移したのは明らかである。しかし、その結果「比嘉氏から離れた(筆者注:川崎沖縄芸能研

究)会の財政は次第に行詰り、当時わざわざ彼女(筆者注:平良リエ子)のために沖縄から指導にやって来ていた渡嘉敷翁の生活さえ支え切れなくなってしまった」(1952年6月30日『毎日新聞』)。1951年渡嘉敷は沖縄へ帰郷し、1953年10月4日逝去した(享年74歳)(1953年10月6日『沖縄タイムス』3)。

一方、池宮はその後1956年頃まで、関東と沖縄を往復しながら前田久進、仲宗根忠治ら演奏家を指導し(新城・持田1999b参照)、野村流音楽協会・第5代会長も務めた。

前述したように、文化財に指定された直接の動機に、1951年4月29日「沖縄諸島の古謡と踊の会」の盛況が挙げられた。同公演出演者のうち川崎沖縄芸能研究会の会員として確認できるのは池宮、渡嘉敷、平良リエ子、佐久川昌子、仲宗根忠治、渡嘉敷亮である。研究会は「1950年7月に初公演、大成功をおさめた」(1953年8月2日『沖縄タイムス』3)という記録があるが、出演者や演目は不明である。川崎沖縄芸能研究会は2003年に50年間の活動をまとめた『川崎沖縄芸能研究会五十年の歩み』を刊行した。

なお、1955年10月30日「東京・沖縄芸能保存会第4回公演(文部省第10回芸術祭参加公演)」(於:東横ホール)では米須清仁、仲宗根忠治、亀川盛要、米須清昌が地謡をしており、研究会発足後も保存会の公演に出演している。

3.3 川崎市・神奈川県の無形文化財に指定された「沖縄民俗芸能」

1952年沖縄民俗芸能を川崎市の無形文化財に指定するにあたり、研究会に働きかけた人物が古江亮仁である。古江による本指定に向けた活動は次のように紹介されている。

日本古代文化の研究家、沖縄については学生時代から理解が深く、沖縄芸能については深い関心を寄せていた人、川崎市の婦人会が沖縄芸能研究会を招き市の公会堂で公演してもらった際始めて川崎市に沖縄芸能が生きていることを知った同氏(筆者注:古江)は“沖縄が戦災に会わなかったなら、また別だが、戦災で傷めつけられてしまった今日、沖縄芸能の将来も多難であることが察せられるので、この際、沖縄芸能を川崎市で保存しようと決心した。”そして機会ある毎に各方面での公演の斡旋をしたり、関係者に呼びかけて見てもらったりなどした(1954年3月7日『沖縄タイムス』夕刊:2)

1951年4月、古江は川崎市教育委員会で文化財と文化振興の仕事の囑託となる。その後、同市中島町のあけぼの婦人会による沖縄芸能の演舞を見る機会があり、「これを文化財として川崎市がとりあげることとその効果を考えてみた」(古江1983:159)。そして、「川崎にあるこの無形の文化財を保護することは、古典文化の保存のためだけでなく、他にもきわめて大きな意義があ

りはしないか。本土在住の県人のみではない、今は本土から切りはなされ、異民族の統治下に物心両面で苦しい生活をしている同胞を元気づけ、その伝統文化を復興し、保持して行こうという気運造りに役立たないであろうか」(古江 1983:159-161)と考えた。そして、川崎市在住の金城時男(沖縄出身、当山久三の娘・ウトの夫)と出会い、文化財指定の動きを活性化させていく。

古江は「川崎の研究会について知る上に大変参考になった」(古江 1954 年 7 月:16)記事として、下記 2 件を挙げている。1 件目は 1952 年 6 月 30 日「沖縄舞踊よ何処へ行く／『赤道祭』のヒロイン／モデルの平良さん『思鶴』舞台を去る』『毎日新聞』である。沖縄芸能保存会が分裂し、川崎で新たに沖縄芸能研究会が創設された経緯が記されている。

2 件目は河竹繁俊 1952 年 7 月 4 日「民俗芸能保存に温い手を」『毎日新聞』2 である。河竹は「沖縄舞踊については、渡嘉敷翁や山内翁や平良女史のいるうちに、文化財委員会が国として先ず手を打ってもらいたいものだ。あれだけの原始形式芸能が内地に 1 つものこっていないからだ」と文化財指定について言及した。特に、本記事の河竹の沖縄舞踊に対する高い評価が古江の活動を後押ししたと考えられる。

また、古江は文化財指定に向けて、川崎市の教育委員会関係者に沖縄芸能を見てもらおう機会を作った。米須清仁会長宅で鑑賞した際、文部省文化財保護審議会専門委員を務める本田安次も参会し、沖縄芸能について解説したことが古江の回想録から確認できる(古江 1954 年 8 月:10 参照)。本田は「昭和 11 年の青年会館に於ける公演(後述)を見てはじめて、そのよさに心うたれ、それから夢になって研究するようになった」(古江 1954 年 8 月:10)と語ったという。

古江の積極的な働きかけにより、1952 年 9 月川崎市教育委員会では「文化財保護の特別ケースとして」(1952 年 9 月 1 日『毎日新聞』)、沖縄の民俗芸能が川崎市無形文化財に指定された。以後毎年、川崎市にて沖縄芸能大会を開催することになる。川崎市から「年額 1 万 6 千円の補助金と公民館無料使用の便宜が与えられ」(1953 年 8 月 2 日『沖縄タイムス』3)、「年 2 回の発表会を持ち、1 回につき 3 万円の補助」(1954 年 4 月 10 日『琉球新報』夕刊:2)が与えられた。

さらに、古江が神奈川県文化財審議会無形文化財専門委員の「永田衡吉氏に紹介したのがもとで、(筆者注:1953 年昭和)28 年 11 月、県教育長中村新一、同社会教育課長黒田六郎、同課長補佐山田恒雄諸氏を始め文化財係員、文化財専門員永田衡吉、木村錦花、原正一等諸氏及川崎市当局が大学川崎市で審査鑑賞会を催した結果、(筆者注:1954 年)昭和 29 年 2 月 26 日、改めて神奈川県無形文化財に指定された」(東恩納 1980:492)。

永田衡吉(1893-1990)は 1927 年柳田国男、折口信夫らと民俗芸能の会⁵⁾を結成した民俗芸能研究家である(日外アソシエーツ 2004 参照)。1928 年 4 月、日本青年館主催「第 3 回郷土舞踊と

民謡の会」が開催され、八重山諸島から上京した人々によって、八重山民謡と舞踊が上演された。公演後発刊した民俗芸能の会の機関誌『民俗芸術』1 巻 6 号(1928 年 6 月:86-92)には折口、柳田、小寺融吉、永田衡吉、伊波普猷他による「八重山島歌舞合評」が掲載された。永田は合評会にて八重山舞踊の演目に関する鋭い質問を投げかけている。

さらに、永田は 1936 年日本青年館で「琉球古典芸能大会」(主催:日本民俗協会)を開催した際、「沖縄芸能を持って来て東京初公開をする実際の仕事をした」(古江 1954 年 10 月:9)人物だった。本大会には当時沖縄を代表する演奏家・舞踊家が総出演し、古典音楽、八橋流箏曲、古典舞踊、組踊などを披露した歴史的公演であった。池宮は地謡として出演し、本田も観客として鑑賞した。その公演の実現に携わったのが永田だった。

永田は 1953 年 11 月 30 日沖縄芸能文化使節団による「琉球国劇公演」(於:日比谷公会堂)も鑑賞していた(古江 1954 年 10 月:10)。さらに古江は「永田さんは私(筆者注:古江)に向って『沖縄芸能の真価は私もよく認めていますから主張はどこまでもします。』と言って下さり」(古江 1954 年 10 月:10)と記した。

また、文化財専門員の木村錦花(1877-1960)は劇作家、歌舞伎研究家である。1925 年 12 月 23 日東京で琉球舞踊研究会⁶⁾が開催された際、田辺尚雄、川尻清潭らと共に木村も参加していた(1925 年 12 月 22 日『読売新聞』5)。田辺は 1925 年 4 月沖縄民謡を織り込んだ歌舞伎舞踊劇『与那国物語』を上演しており、再演の機会を探っていた(高橋 2019a 参照)。その後、1928 年明治座で再演し、1932 年浅草松竹座で 3 回目の上演が実施された(高橋 2019a:210-211)。再演した明治座は木村との関わりが深い。浅草松竹座は 1928 年木村が松竹株式会社取締役役に就任後の 1932 年に上演された(高橋 2019a:218)。よって、木村が琉球舞踊を鑑賞した経験があることは指摘できる。

以上により、沖縄民俗芸能を神奈川県が無形文化財に指定した背景には古江の働きかけはもちろんのこと、沖縄の舞踊・音楽公演に携わった経験を持つ永田と、「沖縄諸島の古謡と踊の会」を開催した本田の存在が影響を与えたと考えられる。さらに、過去に琉球舞踊を鑑賞したことのある木村が文化財専門員を務めていた点も重要である。

神奈川県が無形文化財として指定した「沖縄民俗芸能」の曲目は以下の通りである。

1、組踊「執心鐘入」「銘苺子」「手水の縁」「花売の縁」

2、古典舞踊

「老人踊」かぎやで風節(一名御前風)、

「女踊」諸屯、伊野波節、作田節、月見踊、総掛、四ツ竹、

「二才踊」上り口説、下り口説、八重瀬万才、高平万才、久志万才、前の浜、

「若衆踊」指手節(筆者注:正しくは特牛節=こてい節)

「雑踊り」浜千鳥、天川踊、花風、鳩間節、谷茶節(筆者注:正しくは谷茶前)、江間節、

3、「音楽」茶屋節、昔蝶節、長ちゃんな節、仲節、十七八節、
ちゃんな節、首里節
(永田 1967:900-902)

1954年11月20日神奈川県が無形文化財指定を記念して「県指定無形文化財 第1回発表会 沖縄民俗芸能(公開公演)」(主催:神奈川県文化財協会・神奈川県教育委員会)が神奈川県立音楽堂

で開催された。舞踊は渡嘉敷守良の弟子・佐久川昌子の他多数が出演した。地謡として、三線は池宮喜輝、米須清昌、米須清信、米須清仁、知念平一、仲宗根忠治、大城幸次郎、伊礼嘉長、田場典永、玉那覇山信、西銘生明、宮里良雄、名戸山兼利、島袋孝介、首里春子、仲宗根吉正、前田久進、前田幸子、琴は山ノ端ツル子、長嶺カナ子、笛は富浜宗平、太鼓は佐久川カナ子が担当した(神奈川県文化財協会・神奈川県教育委員会編 1954年11月20日参照)。

表5 関東(東京・川崎・鶴見)における沖縄音楽・芸能団体・関連年表 (作成:高橋美樹)

西暦	元号	関東における活動
1913	大正2	富士瓦斯紡績工場には沖縄出身の男女が多く雇用され、川崎市周辺に居住者が増える
1924	大正13	川崎沖縄県人会が発足
1927	昭和2	7月、阿波連本啓、川崎市で琉球舞踊同好会を開設し主宰する
1928	昭和3	4月、「第3回郷土舞踊と民謡の会」(於:日本青年館,朝日新聞社講堂)で八重山芸能公演
1931	昭和6	鶴見沖縄県人会を結成
1936	昭和11	「琉球古典芸能大会」(於:日本青年館)日本民俗協会主催で組踊、沖縄舞踊上演
1945	昭和20	沖縄帰還者の支援、沖縄県へ救援物資送付するため「沖縄人連盟」発足
1946	昭和21	4月、沖縄古典音楽舞踊保存会設立。10月、財団法人・沖縄財団設立
1947	昭和22	池宮喜輝、川崎市に転住。12月、在京沖縄県人慰安の沖縄舞踊会に渡嘉敷守良、池宮喜輝、児玉清子出演(於:芝労働会館)
1948	昭和23	5月、東京で沖縄芸能保存会結成、師範に踊:渡嘉敷守良、歌:池宮喜輝、又吉栄義。10月、沖縄劇団・奥間英五郎一座は地方巡業出発・お別れ興行開催(於:横浜市鶴見区仲通3ノ2 沖縄会館)。11月9~11日「東京:沖縄芸能保存会第1回公演」(於:読売会館ホール)
1949	昭和24	6月、野村流音楽協会・神奈川県川崎支部設立、初代支部長:米須清仁。11月15日文部省主催芸術祭参加「東京・沖縄芸能保存会第2回公演」 「銘苺子」 「アカマター」他(於:日比谷公会堂)
1950	昭和25	3月、川崎沖縄芸能研究会創設(初代会長:米須清仁、舞踊:渡嘉敷守良、音楽:池宮喜輝) 6月、「東京・沖縄芸能保存会第3回公演」(於:読売会館ホール)
1951	昭和26	4月、古江亮仁が川崎市教育委員会で文化財と文化振興の仕事の嘱託となる。
1952	昭和27	9月、沖縄民俗芸能を川崎市無形文化財に指定。11月、「郷土芸能と沖縄芸能の夕」(於:川崎公民館)川崎市民に一般公開。横浜市鶴見仲通りの潮田劇場(第三鶴映)で沖縄からの劇団が興行(親泊興照、宮城能造一座、大宜見小太郎一座、高安兄弟一座、与座兄弟一座)
1953	昭和28	鶴見芸能協会設立、会長・島袋孝介、8月、川田松夫、池袋で琉球文化守礼会開設。11月、沖縄芸能使節団「琉球国劇公演」芸術祭参加(於:日比谷公会堂)
1954	昭和29	3月、沖縄民俗芸能、神奈川県無形文化財に指定。 11月20日、「沖縄民俗芸能 県指定無形文化財 第1回発表会」(於:神奈川県立音楽堂)
1955	昭和30	10月、文部省第10回芸術祭参加公演「東京・沖縄芸能保存会第4回公演」(於:東横ホール)
1956	昭和31	鶴見沖縄県人会芸能部(部長・平光雄)結成。9月、東京沖縄県人会結成(初代会長・神山政良)
1960	昭和35	冠船流川田舞踊団設立、「黒髪、田園交響楽」上演(於:読売会館ホール)
1967	昭和42	1月26日~29日、国立劇場、第1回琉球芸能公演(冠船踊、組踊)
1970	昭和45	5月、鶴見に琉球芸能文化研究会(1971年琉線会と改称)設立、会長:平光雄、副会長:大城康彦。
1972	昭和47	沖縄県、日本本土に復帰
1976	昭和51	3月、沖縄の民俗芸能、神奈川県無形民俗文化財に指定

まとめ

これまでの考察は以下の2点にまとめられる。

(1) 山内盛彬による湛水流の音声記録

1950年1月18日～19日NHKは琉球古典音楽の演奏家・山内盛彬を招聘し、湛水流7曲と湛水流の解説を録音した。7曲の曲名は《作田節》《早作田節》《首里節》《チャンナ節》《諸屯節》《揚作田節》《曉節》である。その後、コロムビアにより製造されたレコード8枚は、山内が生涯をかけて伝承、伝授してきた湛水流の貴重な音声記録である。1950年当時、山内は東京在住であり、文部省から研究費補助金が交付されて演奏・研究活動がより一層活発化した時期に当たる。本録音は山内が1950年以降、日本国内外で沖縄音楽に関する研究発表や民族音楽調査を精力的に展開する前夜の功績として位置付けられる。

(2) 「沖縄諸島の古謡と踊の会」から無形文化財指定へ

NHKは1951年5月～6月沖縄本島・八重山諸島・伊江島の民謡を録音した。録音に起用されたのは、同年4月29日「沖縄諸島の古謡と踊の会」（於：早稲田大学大隈講堂）に出演した関東在住の沖縄出身者であった。NHKは会で演奏された曲目から22曲を選曲し、レコード14枚を制作した。

「沖縄諸島の古謡と踊の会」の盛況は、1952年川崎市の無形文化財に沖縄民俗芸能が特例として指定された直接の動機でもあった。古江亮仁が川崎沖縄芸能研究会の活発な公演活動を高く評価し、関係者に働きかけたことにより文化財指定が実現した。さらに、1954年には神奈川県の無形文化財に指定された。その背景には沖縄音楽・舞踊に造詣の深い永田衡吉と本田安次の存在があった。指定された組踊、古典舞踊、琉球古典音楽は現在も毎年、川崎市内で発表会を開催し受け継がれている。

謝辞

本論をまとめるにあたり、国立国会図書館には貴重な文献・音源資料を御提供頂いた。本研究は日本学術振興会科学研究費(平成29～32年度、基盤研究(C)17K02365:研究代表者・高橋美樹)「沖縄音楽における現地録音の歴史的研究—田辺尚雄からLP『沖縄音楽総攬』まで」の助成を受けたものである。

注

1) SP 情報は京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター2006:10に拠る。同情報は京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター「田邊氏寄贈コレクション」でWeb公開され、音源も聴取できる。

http://neptune.kcuu.ac.jp/cgi-bin/kyogei/index_tanabe.cgi

2) 1950年沖縄関連の研究費補助は次の記事を参照。「文部省内にある日本学術会議では学術研究奨励のため各部門への研究資

金補助給与を□□審査委員会で決定したが、その中に沖縄関係の分が、左の4項含まれている。▽おもろ双紙の研究□万円(仲原善忠、金城朝永両氏)▽首里言語の研究1万5千円(島袋盛敏氏)▽沖縄民俗の研究1万円(民俗学研究会)▽琉球音楽の研究(山内盛彬氏)」(1950年2月4日『沖縄タイムス』2)

3) 表紙には『沖縄諸島の古謡と踊の会』と印刷されているが、奥付には『沖縄の古謡と舞踊』と記してあるため、本稿では奥付を採用した。

4) 川崎沖縄芸能研究会 <https://kawaokiken.jp> (2019年10月28日閲覧)。初代会長:米須清仁、2代目:米須清昌、3代目:前田久進、4代目:仲宗根忠治、5代目:金城秀吉、6代会長:大城康彦、7代会長:長島清子、8代会長:名嘉ヨシ子である。

5) 1927年民俗芸能を研究対象とする団体「民俗芸術の会」が創立され、翌1928年1月に機関誌『民俗芸術』が創刊された。創刊号(1巻1号)「民俗芸術の会の記」pp.95-96には、会の方針や研究発表、機関誌の発刊について会議した1927年7月8日第1回茶話会、同年10月15日第2回談話会、同年11月12日第3回談話会に永田が出席していた記録がある。

6) 1925年12月23日生命保険協会(東京・有楽町)における琉球舞踊研究会の『演奏曲歌詞』が沖縄県立芸術大学附属図書館・田辺文庫【田辺189】に所蔵されている。

参考文献

- 池宮善輝 1954年2月20日「東京に於る沖縄芸能/戦後、守良翁を中心に新人輩出(1)」『琉球新報』p.4
- 石野朝季 1969「本土における」『日本舞踊大系 沖縄舞踊』邦楽と舞踊社出版部、pp.267-274
- 海野貴裕・金城厚 2008「翻刻『琉球音楽家 山内盛彬氏ヨリノ書翰』『ムーサ』9号、pp.131-154
- 折口信夫・柳田国男・小寺融吉・永田衡吉・伊波普猷他 1928年6月「八重山島歌舞合評」『民俗芸術』1巻6号、民俗芸術の会、pp.86-92
- 神奈川県文化財協会・神奈川県教育委員会編 1954年11月20日『県指定無形文化財 第1回発表会プログラム 沖縄民俗芸能』於:神奈川県立音楽堂
- 金城厚 2004『沖縄音楽の構造』第一書房
- 川崎沖縄芸能研究会編 2003『川崎沖縄芸能研究会五十年の歩み』川崎市市民ミュージアム編 2008『オキナワ/カワサキ:二つの地をつなぐ人と文化』川崎市市民ミュージアム
- 河竹繁俊 1951「沖縄の芸能」本田安次編輯『沖縄の古謡と舞踊』民俗芸術の会、p.1
- 河竹繁俊 1952年7月4日「民俗芸能保存に温い手を」『毎日新聞』p.2(転載記事:河竹繁俊 1952年7月16日「東京における民俗芸能/平良リエ子引退問題など」『琉球新報』p.4)
- 岸辺成雄 1952「紹介と批評/山内盛彬著『琉球の音楽』『東洋

- 音楽研究』10・11号、東洋音楽学会、pp. 79-80
- 岸辺成雄 1993「盛彬先生との交わり 60歳代の先生」『山内盛彬著作集』第1巻月報、沖縄タイムス社、pp. 1-2
- 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター2006『日本伝統音楽資料集成6 日本伝統音楽に関する歴史的音源の発掘と資料化』
- 新城亘・持田明美 1999a「おきなわの外から《関東編》NO. 6: 仲宗根忠治」『月刊琉球舞踊』VOL. 7、シナプス、pp. 18-19
- 新城亘・持田明美 1999b「おきなわの外から《関東編》NO. 8: 前田久進」『月刊琉球舞踊』VOL. 9、シナプス、pp. 18-19
- 新城亘・持田明美 1999c「おきなわの外から《関東編》NO. 10: 平光雄」『月刊琉球舞踊』VOL. 11、シナプス、pp. 18-19
- 高橋美樹 2017「田辺尚雄の沖縄・八重山諸島音楽現地調査(1922年) —「田辺文庫」を基礎資料として—」『高知大学教育学部研究報告』77号、pp. 149-177
- 高橋美樹 2019a「田辺尚雄における沖縄・八重山諸島音楽現地調査(1922年)の成果と社会的還元 —JOAK「日本音楽史講座」、歌舞伎舞踊劇『与那国物語』をめぐって—」『高知大学教育学部研究報告』79号、pp. 203-232
- 高橋美樹 2019b「1953年沖縄芸能文化使節団による「琉球国劇公演」(東京・大阪)とレコード制作 —戦後初の日本本土公演、文部省芸術祭参加作品を探る—」『高知大学教育学部研究報告』79号、pp. 233-256
- 高橋美樹 2020(近刊)「沖縄県立芸術大学附属図書館田辺文庫所蔵・SPレコード目録 —田辺尚雄旧蔵・最古の沖縄音楽レコードを探る—」『高知大学教育学部研究報告』80号
- 田辺尚雄 1962「紹介と批評/山内盛彬著『琉球の音楽芸能史』(筆者注:『民俗芸能全集 第1』)」『東洋音楽研究』16・17号、東洋音楽学会、p. 126
- 東京・沖縄芸能保存会編 2007『躍うどうい/児玉清子と沖縄芸能』新星出版
- 東洋音楽学会編 1951「彙報」『東洋音楽研究』9号、東洋音楽学会、pp. 175-182
- 東洋音楽学会編 1952「彙報」『東洋音楽研究』10・11号、東洋音楽学会、pp. 89-103
- 東洋音楽学会編 1958「彙報」『東洋音楽研究』14・15号、東洋音楽学会、pp. 175-226
- 東洋音楽学会 2016『東洋音楽学会創立80周年記念記録集1 大会篇(1950年~2015年)』
- 東洋音楽学会 2017『東洋音楽学会創立80周年記念記録集2 例会・定例研究会(1936年~2002年)』
- 永田衡吉 1967「第五章 沖縄舞踊」『神奈川県民俗芸能誌 続篇』神奈川県教育委員会、pp. 900-902
- 永田衡吉 1968『神奈川県民俗芸能誌(下巻)』錦正社
- 日外アソシエーツ 2004「永田衡吉」『20世紀日本人名事典』
- 波照間永子 2007「舞踊家オーラル・ヒストリー: 児玉清子の生涯」『琉球・沖縄研究』創刊号、早稲田大学琉球・沖縄研究所、pp. 61-88
- 東恩納寛惇 1980「沖縄民俗芸能が、神奈川県の無形文化財に取上げられるまで」琉球新報社編『東恩納寛惇全集8』第一書房、pp. 489-494
- 比嘉良篤 1950年9月3日「書簡/旧型保存から国際的パレージ化へ/琉球舞踊の構想」『うるま新報』p. 4
- 古江亮仁 1954年7月「神奈川県指定無形文化財になる迄の沖縄芸能(上)」『おきなわ』5巻5号、おきなわ社、pp. 13-17
- 古江亮仁 1954年8月「神奈川県指定無形文化財になる迄の沖縄芸能(中)」『おきなわ』5巻6号、おきなわ社、pp. 10-13
- 古江亮仁 1954年10月「神奈川県指定無形文化財になる迄の沖縄芸能(下)」『おきなわ』5巻7号、おきなわ社、pp. 7-13
- 古江亮仁 1983「10-1 川崎の沖縄芸能と私」川崎沖縄県人会編『川崎の沖縄県人 70年の歩み』神奈川沖縄協会・川崎沖縄県人会、pp. 159-165
- 本田安次編輯 1951『沖縄の古謡と舞踊』民俗芸能の会
- 本田安次 1991『沖縄の祭と芸能』第一書房
- 本田安次 1999「琉球舞踊への想ひ」『日本の伝統芸能 本田安次著作集第19巻—沖縄の芸能・伊豆の島々の芸能』錦正社、pp. 444-445
- 三越編 1930『琉球展覧会目録』東京三越
- 山内盛彬 1950『琉球の音楽 楽譜 第1集』琉球の音楽出版部
- 山内盛彬 1952「琉球音楽史略(1)」『東洋音楽研究』10・11号、東洋音楽学会、pp. 33-53
- 山内盛彬 1958「琉球音楽史略(2)」『東洋音楽研究』14・15号、東洋音楽学会、pp. 55-91
- 山内盛彬 1964『民俗芸能全集 第4(琉球王朝古謡秘曲の研究)』民俗芸能全集刊行会
- 山内盛彬 1967『民俗芸能全集 第10(欽定楽譜湛水流工四(復刻))』民俗芸能全集刊行会
- 山内盛彬 1980年10月16日「私の戦後史(2)」『沖縄タイムス』夕刊、p. 1
- 山内盛彬 1980年10月21日「私の戦後史(6)」『沖縄タイムス』夕刊、p. 1
- 山内盛彬 1980年10月23日「私の戦後史(7)」『沖縄タイムス』夕刊、p. 1
- 山内盛彬 1993「V田辺尚雄先生」『山内盛彬著作集』第1巻、沖縄タイムス社、pp. 518-520
- 山内盛隆・比嘉悦子編 1993「年譜」『山内盛彬著作集』3巻、沖縄タイムス社、pp. 493-501
- 山川修編「山内盛彬」1983『琉球音楽人物事典』山川出版、pp. 29-32
- NHK「日本民謡大観」制作スタッフ編 1995『NHK民謡調査の記録:1939-1994』日本放送協会放送事業局データ情報部

- 1925年12月22日「琉球舞踊研究会/田辺尚雄」『読売新聞』p.5
- 1928年1月「民俗芸術の会の記」『民俗芸術』1巻1号、民俗芸術の会、pp.95-96
- 1928年8月「民俗芸術の会の1年」『民俗芸術』1巻8号、民俗芸術の会、p.89
- 1929年10月25日「広告 松坂屋/琉球美術工芸品展覧会/琉球民謡と舞踊」『読売新聞』p.6
- 1930年1月20日「広告 琉球展覧会 東京日本橋 三越」『読売新聞』夕刊、p.1
- 1948年2月20日「広告 沖縄古典音楽舞踊保存会/顧問:山内盛彬他」『自由沖縄』p.2
- 1948年7月15日「“沖縄芸能”保存の意義 記録作成をいそぐ」『沖縄新民報』B
- 1949年6月25日「出版で世に問ふ琉球旋法の研究」『沖縄新民報』B
- 1949年10月25日「琉球音楽の蓄/山内氏の力で開花/文部省研究費を投下」『沖縄新民報』B
- 1950年1月5日「名刺紙上交換会」『沖縄新民報』C
- 1950年1月25日「湛水流 山内氏の吹込で音版に蘇る」『沖縄新民報』B
- 1950年2月4日「オモロや琉球音楽等/文部省が研究費補助」『沖縄タイムス』p.2
- 1950年2月5日「広告 研究生募集(月謝不要) 沖縄芸能保存会」『沖縄新民報』A
- 1950年5月25日「沖縄古謡/山内氏が採譜」『沖縄新民報』B
- 1950年9月25日「広告 山内盛彬著“琉球の音楽”/レコード取次/湛水流8枚/鳩間節1枚」『沖縄新民報』B
- 1950a年10月15日「広告 山内盛彬著“琉球の音楽”/琉球音楽発表会/レコード取次/湛水流8枚/鳩間節1枚」『沖縄新民報』B
- 1950b年10月15日「青い目で伊野波節/山内さんと共に演奏/来る28日東都で公演」『沖縄新民報』B
- 1951a年5月15日「出身地別に出演/民族芸能の白眉」『沖縄新民報』B
- 1951b年5月15日「日本芸能の古里/沖縄の古謡と舞踊/早大講堂を埋めて熱演」『沖縄新民報』B
- 1952年5月5日「山内盛彬さんペルーで公開演奏」『沖縄新民報』B
- 1952年6月30日「沖縄舞踊よ何処へ行く/『赤道祭』のヒロイン/モデルの平良さん『思鶴』舞台を去る」『毎日新聞』
- 1952年8月25日「山内氏伯国着」『沖縄新民報』p.4
- 1952年9月1日「【神奈川版】 亡び行く沖縄の古典芸能を護る/川崎市教委が文化財保護の特例」『毎日新聞』
- 1953年8月2日「夏休みに憧れの東京公演/琉球舞踊の少女たち/補助金出して援助/川崎市/沖縄芸能に力こぶ」『沖縄タイムス』p.3
- 1953年10月6日「渡嘉敷守良氏逝去/生涯を琉球舞踊に捧げて」『沖縄タイムス』p.3
- 1954年3月7日「県文化財指定の蔭に/脚光浴びた川崎の沖縄芸能/500年前の因縁も/熱心に説き回った古江氏」『沖縄タイムス』夕刊、p.2
- 1954年4月10日「琉球芸能発表会/川崎市で/文化財指定を記念に」『琉球新報』夕刊、p.2
- 1958年10月4日「池宮喜輝氏年譜/琉球音楽を育成」『琉球新報』p.3
- 2001年9月23日「渡嘉敷守良生誕121年記念公演/渡嘉敷守良年譜」『華やぐ芸風 守良の世界』パンフレット(於:那覇市民会館大ホール)pp.36-41
- 2016「山内盛彬」『日本人人名大辞典』講談社
- 2018年3月2日「しなやかに琉球王朝の舞『渡嘉敷守良流』保存会 東京で70周年」『東京新聞』